ＤＩ［ｅ］ＶＥ

武倉悠樹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＤＩ［ｅ］ＶＥ

【Ｎコード】
Ｎ４３２５Ｌ

【作者名】
武倉悠樹

【あらすじ】
都内で連続して起こる高校生連続投身自殺事件。若者を取り巻く閉塞感と社会の歪みが実体化したようなその事件は世間にセンセーションを巻き起こす。
大人たちが再発防止に奔走するも、止まらぬ事件。その裏側に潜んでいたのは「自殺ネット」なるＳＮＳだった。
退廃的で鬱屈した学生たちの心理と悪意を救いなく描くモダン非青春系ドラマ。

the introduction

そこには何もなかった。

ただ儚げに輝く光と、深い、とても深い闇だけがあった。

世界は光を闇へと誘った。

闇へとおちていく光。

落ちる。墜ちる。堕ちる。

おちながら、光は徐々にその輝きを増していった。

鮮やかさを精一杯咲き誇らせちいさな光はまっすぐに闇へと吸い込まれていく。

そして。

最後に真っ赤に爆ぜると、光は、その輝きを永劫に失い、闇だけが残った。

出「我が娘の１４年」
抜粋～前沢由香の遺した言葉より～
２００３年　前沢香織著

絶命の恍惚 - 長野美紀子の終幕 -

雨上がりの湿った風をその身に受け、一人の少女が屋上に佇んでいた。

夜風にまきあげられた長い髪を押さえながら、彼女はもう一度振り返り最後の確認をする。想像していたよりもずっと平静さを保っている自分の心に少し驚きつつ、再び正面へと向き直ると、一歩二歩とその歩みを進める。

ふと、数分前まで口にしていたミントのガムの後味が口の中からきれいに消えていることに気づいた。味覚がなくなっている。

そんな違和感に戸惑いながら深く息を吸い込み、そして、ゆっくりとその空気を押し出していく。深呼吸を数回。

今度は匂いを感じなくなっていることに気づいた。ここへ来てから鼻についていたのが嘘だったように、コンクリートやアスファルトを冷たく濡らしていた雨の匂いが消えている。

感覚の消失。自らを襲った奇妙な現象に、多少の困惑こそ覚えたもののそれでも彼女は冷静であった。彼女の意思は揺らがない。

意を決してさらに一歩を踏み出す。最後の一歩を踏んだその足が世界の果てにかかる。

そしてその時を待つ。

足の裏にわずかに感じた衝撃とともに、彼女の体は夜の虚空に投

げ出された。

それまで大地に対し垂直だった体は、徐々に傾きを増し、やがて水平に。そしてついに足を天に向け、頭が大地へと向く形になる。重力という絶対の法則に従い、彼女は闇への加速を始めた。

高まる速度で彼女の見る世界はその輪郭を歪め始める。そして水の中へ墨汁を一滴一滴と垂らすように、周囲の黒がその濃度を増していく。視界の隅で煌めいていた街の灯りは闇へと吸い込まれていき、世界は暗がりから深い闇へと変化を遂げていく。

すさまじい速度で空気を突き抜けていく音が耳の奥で鳴り響く。しかし、頭を打ち鳴らすかのごとく響いていた風切り音もやがてそのなりを潜める。小さくなるというよりは遠くなっていくように聞こえなくなっていく音と反比例に闇は一層その深さを強めていく。

飽和するほどの黒を湛えた闇はやがて色の概念を失い、変貌を遂げる。視覚は無へと呑み込まれ、音も消える。残された触角もいつの間にかその力を失い、身を叩く空気を感じなくなっていた。

もっと一瞬で終わるものではないのか。

ふと、彼女の脳裏にそんな考えがよぎった。

味覚に始まり五感を失った世界で、彼女の思考は研ぎ澄まされていった。

その時、体の奥底にある何かを彼女は感じた。その何かを認識したのもつかの間、それは大きく膨れ上がると彼女の中で盛大に爆ぜた。

唐突の爆発の後に待っていたのは恍惚だった。

美味しいものを食べた時。異性と体を重ねた時。そんな時に感じられる肉体的快感とは異なる。また達成感や充足感といった精神的に感じる満足とも違う。体の奥でもなく心の奥でもない場所、強いて言うなら魂とでも言うべき根源から滾々と湧き上がってくる愉悦。

それが彼女を包んでいた。

その正体はいったい何なのか。

彼女は知識でもなく、経験でもなく、思考でもなく、本能でそれを悟った。

これは生であると。

今までの人生で終ぞ感じることのなかった溢れるほどにたぎる生が、今この瞬間彼女の全身全霊を駆け巡っている。

極上の喜びに体は震え、涙は止まる事を知らなかったが、やがて長かった一瞬はその終わりを迎える。

喜悦に浸る彼女の意識が一転、世界を取り戻す。世界を隔てる絶対の壁を認識すると、笑顔を浮かべた彼女は自らの潰れる音を最後に聞くと、永劫の闇へと堕ちていった。

長野美紀子の命はこうして幕を閉じた。

狂気の片鱗 - 倉瀬幸弘の朝 -

手元のリモコンを操作し音楽プレーヤーの音量を上げる。朝に不釣合いなエレキギターの音色が、その強さを増して鼓膜を叩いた。俺、倉瀬幸弘の一日はいつもこの音楽とともに始まる。

ドアノブを回し、部屋を出て、階段を下りる。玄関に腰掛け、靴紐を結んでいるところでふと、背後に人の気配を感じた。

後ろを振り仰ぐとそこには、十五年前に俺を生んだ女が立っていた。口がせわしなく動いているところを見ると、何事か喋りかけているようだ。しかし、部屋を出てきた時から流れていた曲はちょうど中盤に差し掛かろうというところ。ソロパートを迎えたギターが力強くかき鳴らされていて俺にはそれしか聞こえない。

俺の耳に届くことはないこの女の言葉は、おそらく「ハンカチ、ティッシュは持ったか」や「車には気をつけなさい」などといったところだ。到底高校生になる息子にかける言葉ではなく、過保護にも程が在ると思うのだが、この女はそんなことお構いなしなのだろうかと疑念が湧く。しかしすぐさま疑念を振り払い、靴紐に意識を戻した。理解できそうもない他人の思考など考えるだけ無駄だ。

靴紐を結び終えると、鞄を手に取り立ち上がる。顔を見ることもなく声も掛けぬまま家を後にした。

家を出て十数メートル。通りから少し奥まったところにある自宅から、住宅街を縦横に走る小さな通りに出たところで電柱の脇に佇むカラスを視界の端に捉えた。

漆黒の翼と鋭い嘴を持つそのカラスが目を向けるその先には、保

護ネットに覆われたいくつかのゴミ袋。半透明のビニールからは何かの骨や野菜のクズの様なものが窺い知れる。どうやら朝餉にと生ゴミを漁りに来たらしい。

ふとその存在が気にかかった俺は歩みを止めた。

リモコンの一時停止を押すと、耳に流れ込んでいたギターやドラムの紡ぐ荒々しい旋律が止み、朝の静寂が訪れる。朝にも関わらず偶然通りに他の人間の影は見えなかった。静かな世界でカラスを見る。

カラスは人間の存在を気にかけているのか、一思いにゴミ袋を突く様子は見せない。しきりに周囲を気にしながら、ゴミ捨て場からつかず離れずの位置をピョンピョンと跳ね回っている。

「カァー」と一声。俺は何の気なしにカラスの鳴き真似を口にする。

その声に気づいたカラスは深い黒を湛えた瞳をこちらに向ける。何を思うのか。それを窺うことは出来ない。

俺は、こちらに意識を向けてきたカラスに答える様にしてもう一度口を開く。

「カァーー」

怪訝そうにこちらを窺っていたカラスは、二度の不審な行動によって俺を敵と認識したのか、それとも人間が立て続けにとった下らない行動で興を削がれたのか。俺から顔をそらすと、ゴミ捨て場に一瞥する事も無く、無言でどこかへと飛び去った。

俺は小さくなっていく黒い翼を見送ると、音楽を再生させ、駅への歩みを再会した。

歪んだ歯車 - 倉瀬幸弘の朝２ -

駅から徒歩八分程、緩い勾配の並木坂を登ったところにあるのが俺が通う「私立御坂学園高等部」だ。

周囲の同じ制服を身にまとう学生たちと同様、三年間毎朝登ることになる坂を呪いながら学校へと向かう。学園の名前にも冠されている坂は最後で緩やかな右カーブを描いており、並木を抜けたところに校門を構えている。

俺はそのカーブの出口が眼に入る前に、コートのポケットに手を突っ込みプレーヤーの電源を切った。耳から外したヘッドフォンのコードをくるくると巻き取り、プレーヤー共々かばんに突っ込んだところで校門が見えてくる。

案の定、校門には教師らしき姿が見えた。威勢よく挨拶をしてくる見知らぬ教師に会釈しながら瀟洒なアーチをくぐる。

下駄箱の前でクラスメイトに声を掛けられた。

「うい～す。おはよう倉瀬！」

振り向きざまに一瞬で陰鬱な気分を心の奥底に押し込めつつ、同時に脳裏である記憶を検索。導いた答えを満面に貼り付ける。一部の狂いもない笑顔だ。

「おぉ！　おはよう！」

挨拶を返した三島は早々に上履きを引っ掛け、廊下の曲がり角に

消えていった。

ため息が漏れる。今日も一日、なんの興味関心も無い高校生活がはじまると考えた時、そのため息を止める方法を俺は知らなかった。外して五分もたたないプレーヤーがもう恋しくなる。

自分のクラスに入り、クラスメイトに先ほど同様の笑顔で挨拶を済ませると、少し気は楽になる。さすがに音楽を聴くわけにはいかないが、持ってきた文庫本でも広げておけば教師に見咎められることもないし、余程のことが無ければ、誰も話しかけてこないからだ。

唯一怖いのは、ガラの悪い連中の暇つぶしの相手に選ばれる事だが、成績を平均に保ち、身なりに気を遣う事、具体的に言えば、髪のセットや、制服を目立たない程度に着崩しておけば目を付けられることもない。彼らが欲しているのは分かりやすい弱者か、良くも悪くも突出した異彩を放つ人間であり、その他大勢になど興味は無いのだ。

カバーをかけた文庫本を開き、栞を挿したページをめくる。

今読んでいる作品は、放射性物質を分解して無害化するバイオレメディエーション技術を確立した人類が、その弊害ゆえに全面核戦争の危機に瀕しているというＳＦだ。題名は「ＷｏｄｅｒＯｆＶｅｒｍｉｌｉｏｎ」日本語に訳すと朱色の奇跡となる。ハリウッドで映画化もされ、それなりに成功もした作品らしい。

俺は、ハリウッド的なご都合主義によるハッピーエンドの作品は好んで読んだりはしないのだが、その映画が原作とは一切違うエンディングでハッピーエンドとして纏めた事。原作は映画版と異なり、割と骨太なＳＦでしかも、あまり救いの無いエンディングを迎える

らしいとの情報をネットで目にし、手に取った。

はっきり言ってＳＦ部分が難解すぎるのに最初は失敗したか、と思ったのだが、深い理解をあきらめ適当に読み流していく様にすると、テンポよく話がすすみ、気晴らしには持って来いなのと、作品全体に漂う退廃的な空気が気に入り、ここ最近の空き時間はもっぱらこれだ。

席に腰を落ち着け、静かに数分間ページをめくっていると、ふと周囲に漂っていた朝の喧騒がすっかり姿を潜めていることに気づく。

文庫から目を離し、顔を上げると、出席簿を持った担任の小関が教壇の上から、生徒の姿を確認しながら出席を取っていた。いつのまにか朝のＨＲが始まっていたらしい。

もう一度、文庫に目を落とす。別にＨＲなどすることも無ければ聞くことも無い。八時四十分の時点で自分の席に座っていさえすれば構わないのだ。

文字列を再び追かけようとした時、いつもの担任の声とはすこし趣の異なる声が響いた。

「あー、皆、すまん。ちょっと注目してくれ」

その神妙な声色に、生徒たちは互いに顔を見合わせ、どよめく。

俺はといえば、文庫本から目は話さず、耳だけを傾けた。

「もしかしたら、察しのついてるやつもいるかもな。……あー、えっと。まぁ、最近ニュースになってるやつの話だ」

俺は顔を上げた。

「直接どうこうでなくても、事件を知らん奴はいないよな？」

慎重な物言いで探りを入れるようにして話し、一拍間を置くと、生徒の反応を待ち小関は続けた。

「最近、都内の高校で痛ましい事件が続いている。うちの高校でもそれは無視できないとして、緊急の対策会議が開かれたんだ。保健室に併設されたカウンセリングルームの存在の周知と利用の促進、希望者による個人、家族面談とかな。詳しくはあとでプリントを配る。かならず目を通してくれ」

小関が言っているのは最近都内の高校生の間で一種の流行になりつつある連続投身自殺の件だ。今この事件を知らない高校生など居ない。それどころか連日ワイドショーでも、報じられ、七週連続、毎日曜の深夜に行われる生徒の自殺に教育関係者は戦々恐々として、必死に対策のために知恵を絞っている。

いまや自殺者など珍しくない日本だが、それが高校生、しかも、在学中の校舎から身を投じているとなれば、人々の受け取り方も変わる。

学校側としては、自校の生徒が自ら死を選んだとなればイメージの大幅な悪化は避けられない。イジメ対策や、生徒の心のケアなどに東奔西走を余儀なくされている。

保護者も必死だ。家の子が自殺しやしないかと、眠れぬ日々を送る親も少なくないと聞いた。不安になっている時点で、しっかりと

子供を見てやれていない、親子間で信頼関係を築けていない証拠ではないかと、ニュースを聞いたときに呆れたものだが、もしなにかあったら学校側の責任であると学校に詰め寄る親も居るというのだから、呆れを通り越して理解不能な次元だ。

対し、学生の側は少し受け取り方が異なる。自分の周囲でも、諸手を振ってはしゃぐ人間は居ないが、心のどこかでお祭り騒ぎの様な印象を持っている人間は多い。

一つは通り魔や、原因不明の失踪等でなく、あくまで自殺であること。これによって格段に恐怖は薄れる。自分に自殺願望がない人間にとっては他人事なのだ。

もう一つの理由。それがこの一連の事件の奇怪さとその興味を引く構造だ。

「自殺者に横のつながりは無く、偶発的または、印象の強いセンセーションに乗じて自殺した生徒が後を経たないだけで、事件そのものはそこまで重要ではない。少し目を強めに光らせていれば次期に沈静化するでしょう。今、真に問題なのは潜在的な自殺願望を抱いている青少年を取り囲む今の社会が……」と解説を垂れるコメンテーターをニュース番組で目にしたことがあるが、てんで的外れだ。

自殺願望と社会云々なんてことは偉そうにご高説を垂れずとも現代に生きている人間なら誰しもが少なからず空気として感じている。

先進国の中でも断トツの自殺率をたたき出し、さらにその数字ですら自殺したのが濃厚と思われる行方不明者を自殺者にカウントしないことで少しでも低く見せようとしているのが現状だ。したり顔で話すようなことじゃない。

さらに、このコメンテーターが真に的外れなことを言っているのは大切なことを知らないからだ。即ち、無いと思われている自殺者の横の繋がりである。

警察や学校側が報道管制を敷き、世間一般に広く知られている事実ではないが、自殺した生徒たちには確かに繋がりがある。共通点といったほうが正しいだろうか。

「ここからは、俺個人の意見だ」

熱っぽさを増した小関の声がボリュームを一段階上げて響いた。

思考を停止し、小関の声に耳を傾ける。

「なんか相談事があればカウンセリングルームなんかじゃなくてもいい。放課後でも、休み時間でもいいから俺に相談に来い。女子だったら、隣のクラスの武田先生でもいいしな！」

時代が時代なら、人が人なら、感動を呼んでもおかしくない台詞を小関が口にする。

しかし、その熱意はクラスには届かない。なぜならそれが熱意じゃないことを皆は知っているからだ。

学校側、というよりも大人は勘違いをしている。

そもそも生徒は教師に何も期待しない。良い教師とは教え方が巧い教師であり、それは予備校に行けばいくらでも居る。学校の教師に求めることなど生徒に干渉し過ぎないことであって、親身に相談

に乗ってくれることではないのだ。

小関は、その点でいい教師といえる。彼は、生徒を褒めない。咎めない。一定の距離を保ち続ける事が、生徒が今の教師に求める資質だ。小関はそれが出来ている教師だ。だからこそ、その熱意が心の底から湧き上がっているものではないことを俺たちは知っている。もちろん其処に落胆はない。俺たちがそれを小関に望んだ。

小関はそれも全てわかっている。この学校には数少ない貴重な教師だ。

だから、生徒は小関を信頼している。信頼し、心の境界線を絶対に踏み越えてこない大人として安心して頼らない、という態度を崩さないのだ。

小関は学校側が急遽要したと思われるプリントを配ると、ＨＲを終えて、教室を後にしていった。

噂の裏側 - 倉瀬幸弘と湯島誠との会話１ -

ＨＲ終了後の教室は少し異様な雰囲気に包まれていた。

高校生連続投身自殺事件は小関の言うとおり高校生の間で知らない者は居ないほどセンセーショナルな話題だ。それに対し、今までは仲間内で密かに話題にするというような関わり方をしていた多くの人間が、その態度を変えつつある。

大きくなり続ける事件に対し、忌避感を抱き始めるもの。大人たちの動揺を知りつつ、高揚感を抱き始める者。大勢はそれに二分されているようだ。

ＨＲから開放された俺は文庫本に栞を挟み、机の中にしまう。事件を話題にした女子の囁き声を耳にしながら、一限の時間割を確認し、外の廊下に備え付けられたロッカーに教科書を取りにいった。

数学の教科書と、ついでに、二限で使いそうな英和辞書を手に、席に戻ろうとしたところで、後ろから声をかけられた。

「幸弘～！」

振り返るまでもなく、誰に声をかけられたのかがわかった。

こんな間延びした声を出す男も、俺を「倉瀬」ではなく「幸弘」と呼ぶ男も、俺は一人しか知らない。

面倒くさいことをふっかけられる前に、早々と自分の教室へときびすを返す。しかし、敵は、俺の前に回りこんできて、両手を大業

に広げ、俺の道をふさぐ。

「おいおい、無視は無いんじゃない？　幸弘君」

湯島誠だ。俺の行く手を遮っている湯島はこの高校で唯一、俺と同じ中学出身という経歴を持っている。

とは言え、中学時代から特に面識があったわけでもないのだが、唯一同じ中学からきているという俺の存在を知った途端やけに馴れ馴れしく絡んでくるようになり、挙句の果てに下の名前で呼んでくるようになった図々しい奴だ。

「あ、おはよう、湯島！」

俺は、さも、今湯島の存在に気づいたという風に驚いた顔で挨拶をした。

「お、あ、あぁ。おはよう」急に挨拶をされた湯島は少し、困惑の顔を見せながら、挨拶を返してくる。

俺はその隙に湯島の脇を抜け教室に入る。

「ちょ、ちょい！　待てって幸弘」

慌てた湯島が、再度俺の前に立ちはだかる。俺はため息混じりに用件をうかがう事にした。

「なんだよ？」

「英語の辞書貸して」

「あぁ、持ってない」

俺は即答した。

「すごいな、お前。なんでノータイムで、しかもそんな堂々と嘘つけるの？」

湯島は、俺が小脇に抱えていた辞書を指差しながら、目を細めて俺を訝しむ。

「ごめん、間違えた」

俺は臆面も無く嘘を重ねる。

「……。あぁ、うん」

「はい、辞書。二限使うから、授業終わったらすぐ返しに来て。それじゃ」

呆れ顔で、辞書を受け取った湯島は、何か言いたそうにこちらを見つめている。

「なに？　まだなんか要るの？　教科書の方は貸せないよ、リーディングでしょ一限？　俺次の授業中に和訳やっとかなきゃだから」

「いや、教科書はいいんだけどさ。……さっき声かけたの気づいてただろ？　お前」

俺は、おちょくる様にさっきの驚き顔をもう一度再現して、応え

てやる。

「え？　あたりまえじゃん？　少しでも気づいてないと思ったの？」

湯島は甘やかすと付け上がる性質で、その気だるげながら甘めの顔立ちと持ち前の人懐っこさでずいぶんと交友関係も広いようだが、俺は一定以上の距離を置いていた。とは言え、湯島に限らず、他に距離を置いていない友人など居ないのだが。

「お前、ほんっと底意地悪いな」

「余計なお世話だよ」

湯島に背を向け今度こそ、教室へ戻ろうとする俺を、しかし湯島の口から飛び出した話題が引き止めた。

「あぁ、そういえば。お前のクラスでも話題になった？　例の事件。ウチのクラスの武田ちゃん、色々ヒスってたぜ？」

交友関係も広く、話好きな湯島の口から飛び出たのは、やはり高校生連続投身自殺事件の話だった。

一限まで、少し間がある。俺は湯島に振り返り、話題に食いつくことにした。

「武田先生が？」

普段そっけない態度しかとらない俺が、自分の話題に食いついてきたのが嬉しいのか、湯島は上機嫌で続ける。

「そ。皆さん何でも相談してくださいね！　なんて声を裏返しなが

らな。その点あれだろ？　お前のトコの小関はわかってる感じじゃん？」

何をわかっていると言うのか。それは勿論、生徒と教師の距離感の事だ。湯島ほどあっけらかんとした男でも、教師に対する心の壁が薄いわけではない。大人と距離を保ちたいという欲求は現代の高校生の共通見解なのだ。

「それに比べて、武田ちゃんなんか、半分涙目で語りかけてくるんだもん、ちょっと引いちゃうよな。それに、学校側の対策もちょっとずれてるしな。この事件の仕組み理解してないんだろうな、きっと」

湯島の口から気になる言葉が漏れた。

「仕組み？」

俺が問い返すと、湯島の緩んだ顔が一転、引き締まる。

「あれ、幸弘知らねぇの？」

さっきまでと打って変わって、声を潜めるようにして、顔を寄せて来る湯島。

「まぁ、幸弘こういうの疎そうだからな」

「なんだよ？」

「いいか、あんま人には言いふらすなよ」

人に言いふらしてはいけない話を俺に言いふらすのはいいのか、と疑問がよぎるが、俺はおとなしく首肯し、続きを促した。

「自殺ネットってのがあるんだよ」

「自殺ネット？」

「そう、マスコミの報道なんかでも流れてなくて、っていうか、世間はぶつ切りの自殺が偶発してるって思ってるだろうけどな、実は違う。この連続自殺は、あるネット上のコミュニティに端を発した計画的な自殺だって話だ」

幸弘に肩をつかまれ、ロッカーの陰に身を寄せるよう促される。いつもとはだいぶトーンを落とした声で湯島は切り出した。

話者の真意 - 倉瀬幸弘と湯島誠との会話２ -

高校生の間である種都市伝説のように伝播している、『自殺ネット』なるものが存在すると言う。

『自殺ネット』を見るためにはまず、ネットに存在する匿名掲示板に、メールアドレスを添えてある特定の書き込みをしなければならないのだそうだ。書き込みをすると、そのメールアドレスに、携帯電話からしか見れない、既参加者からの認証式ＳＮＳのアドレスが送られてくる。そしてＳＮＳに入会し、そのＳＮＳ内のコミュニティのあるトピックに書き込みをすることで、携帯に確実に自殺できるようにお膳立てられた日にちと時間、場所が送られてくるという仕組みらしい。

不可解な事件の裏側に潜む陰謀を嬉々として語る幸弘の言葉に耳を傾けながら、俺は一つの疑問を抱いていた。『自殺ネット』の存在が事実なのであれば、その手回しをしている人間は大量の自殺幇助の罪で実刑は免れないのではないか、という事だ。

認証式の閉じたＳＮＳといっても、規模が小さく、参加者全員が互いに監視しあえるような状況でもなければ、完全に密閉された情報空間などネットには存在しない。一連の投身自殺の生徒達は、皆学校はおろか学区も出身中学といった共通点すら見えてはいない。つまり、直接面識のない人間同士が在籍するぐらいにはそのＳＮＳの規模が大きいという事だ。

仮に、規模が小さく、完全に外部から遮断されたネットワークだとしても、警察がその気になればプロバイダー経由でも何でもその細かな情報を捜査することなど訳ないはずで、主催者なり幇助をし

た人間なりはすぐさま後ろに手が回るはめになるはずだ。

「まぁ、焦るなって。その辺にもちゃーんと、良く出来た仕組みがあるんだよ。」

率直に浮かんだ疑問を口にすると、湯島は待ってましたという風に得意になって語りだした。

「鍵になる単語があるんだよ。正にキーワードって奴だな」

「キーワード？」

「そう。コミュニティ内のトピックにただ自殺したいなんて書き込んだところで、お膳立てが整うわけでもないんだよ。合言葉みたいなもんでな。自殺志願者と、管理者にしかわからない合言葉を正しく使ったやり取りがなされないと、『件の紹介』は送られてこないって寸法」

「どんな？」

「知らない」

急に肩透かしを食らった俺は、慌てて開いた口を引き締める。

「なんだよそれ。ここまで話しといて、気になるじゃん」

「知りたいのか？　自殺の方法」

そこまで、得意げに自分の知ってる情報を語っていた湯島の様子が一変し、饒舌な口は沈黙を生む。甘い顔に定評のある湯島の眉間

に深いしわが刻まれた。

一層トーンを落とした湯島の眼光が俺の瞳を貫く。俺は一切の内心を表情に表すことなく、その眼を見つめ返した。休み時間の喧騒の中に、二人だけの静寂が訪れる。

突如訪れた異質な空気は、しかし、休み時間の終わりを告げる予鈴によってかき消された。その音を契機に、いつもの湯島が再び姿を表した。声のトーンも戻っている。

「情報通で通ってるまこっちゃんとしても、そこを抑えてないのは悔しいんだけどね～。なんでもそこは口コミらしいんよ」

「口コミ？　合言葉が？」

わざとらしく腕を組んだ湯島は、これまたわざとらしげに首を傾げながら答える。

「ってう、わ、さ。だから警察とかそういうのも中々全容を解明できないって寸法なんだと。常に一定の周期で変わるらしいしな、合言葉。今正しい合言葉は何かって色んな噂が錯綜してるよ」

時間切れの鐘に、早口になった湯島がまくし立てる。

「ま、お前もどっかで耳にしたら教えてくれよ、合言葉」

そこまで口にしたところで教材と出席簿を小脇に抱えた教師から横槍が入った。

「うおーい。そこに居んのは誰だ！？　んー、沢村か？　あ、湯島

と……倉瀬か！　チャイムが聞こえてないとは言わせんぞ！」

注意を促した教師へ「すいません」とばかりに手を挙げて応じると、湯島は俺に背を向けた。

「ありがとな、辞書！　一限終わったらすぐ返すから！」

「お前も！」

小走りに、自分の教室へと帰っていく湯島に、俺は最後の疑問を投げかけた。

「お前も、知りたいのか？　合言葉」

湯島の足が止まる。ゆっくりとこちらを振り向いたその顔は先ほどの険しい顔が再び浮かんでいた。

「……」

「それがあれば完璧に自殺できるんだろ？」

俺は再度疑問を投げかける。それで生まれる波紋は一体どんな模様を描くのか。

俺の問いに湯島が今までみた事のないような真剣な表情を浮かべるがそれも一瞬だった。すぐさま、八重歯を覗かせ相好を崩す。

「ネット上で結構な高額で取引されてるって噂だからな、合言葉」

そう最後に言い残し、湯島は今度こそ、教室へ引き上げていった。

湯島が俺に背を向けるのと同時に、俺の教室にも教師がやってきた。生物の三上は「はいはい、そんなとこ突っ立てると欠席にしちゃうぞ～」と俺に注意を呼びかける。

俺は、すいませんと応じて教室に入った。

後ろ手でドア閉めながら湯島に届くはずもないと判っていて独りごちる。

「合言葉は“カスパーゼ”だよ、湯島」

授業開始を告げる本鈴が校舎に響く。それに呼応するように胸の内ポケットに入れている携帯がバイブレーションによって鳴動していた。

鍵を求めて - 湯島誠の昼休み -

チャイムが鳴る。昼休みだ。

いつもなら一日五十食限定のCランチ争奪のレースに走っていくところだが、今日はそんな気分じゃなかった。休み時間ごとに様々な教室を奔走し、目についた知り合いに可能な限り話しかけるも合言葉候補は一度も耳にできなかったからだ。

このところ、連続投身自殺事件の盛り上がりにあいまって、自殺ネットの存在を知っている人間も増えた。だから一日その話題について喋ってれば、真偽はともかくとして誰かしら合言葉を見た、聞いた、となっていたのだが。今日は不作だ。

ネットやアングラ系に詳しそうな印象があったC組の根岸なんかは、予想通り自殺ネットには詳しかったのだが、合言葉は教えてくれなかった。今、あの時の会話を思い出しても腹が立つ。

オタク系の自尊心を煽ろうと下手に出て教えを乞うように話しかけたら、ずいぶんと上機嫌に話し始めるまでは良かったのだが、肝心の合言葉の段になったあたりで「知りたい情報は聞けばすぐ答えが帰ってくるなんて思っているその態度はいかがなものか」なんて説教を垂れ始めやがって。

俺もたまにネットの掲示板なんかを利用するし、対価を求めずにただただ「〜〜を教えて」なんて態度を忌避するネットの文化は多少見聞きしたことがるが、面と向かってそんなこと言うかよ、普通。確かに今まで頻繁に会話してた仲じゃないし、友達って程でもないけどよ。

「誠〜、お前今日食堂じゃねぇの？　弁当？」

根岸の事を思い出し、頭に登っていた血が、突如かけられたクラスメイトの三宅の声によってすっと降りた。振り向けば、三宅と伏見が、教室のドアの側で、手招きをしている。

「おいおい誠さんよ、スタートダッシュ遅くね？　もうCラン完全にアウトじゃん。なに？　四限の世界史爆睡してたん？」

昼休み、四限が終わる否や教室を飛び出し、昼ごはんは三宅と伏見と俺の三人で食堂へ繰り出すのが常だ。ついでにその後中庭のバスケコートでA組の連中と3ｏｎ3をすることも。

しかし、今日はやることをまだなしていない。聖のやつは「別にどうしてもってわけでもないから」なんて言ってたが、やはりその辺で頼れるところを見せておきたいと思うのは男の性だ。

「悪い！　今日俺食堂いいわ！」

「は？　なに？　誠弁当なの？　あ！　まさか弁当、聖ちゃんの手作りなんじゃね！」

三宅が急にシフトチェンジをして早口でまくし立てる。

俺はといえば、三宅のいつもの囃したてを冷静に聞き流そうとし、しかし、後半の台詞に理性をやられた。

「お前が聖ちゃんとか言うな！　殺すぞ！　はいはい、しかもそもそも違う。弁当じゃない。したがって聖の手作りということもない。

残念でした。バ〜カ。あと最後にお前が聖ちゃんとか言うな。殺すぞ！　福沢さんと呼べ！」

さっきの軽口に倍するスピードでまくし立て、三宅を黙らせる。

俺の剣幕に怯んで口を噤まされ、「誠くんが怖いよ〜」と寄りかかってくる三宅を無視して伏見が口を開いた。

「弁当でもないの？　昼は？」

「あぁ。昼飯抜いて金浮かそうと思ってさ」

「「ふ〜ん」」

三宅と伏見がハモッた。

「今、金欠でさ」と俺は嘘をつく。

普段の俺の行動パターンとかけ離れた言動を訝しんだ三宅と伏見だったが、俺の金欠の一言で得心がついたようだった。「じゃ、俺らだけで行くわ」と手をヒラヒラと振りながら教室を出て行く。その後、伏見が廊下から顔を覗かせ、「じゃ、バスケコート先行って取っといてよ」と軽口を叩いた。

「飯食えないのにバスケなんかやってられるかよ！　図書館で、放課後まで昼寝でもしてるわ」

伏見の軽口に、同様の軽口で返した俺は、三宅と伏見が出て行ったドアとは別のドアから教室を後にした。

昼休みに人が集まるのはどこか。ひとつは食堂。ひとつは中庭だ。しかし、さっきああ言った手前、そのどちらにも顔は出しづらかった。

正直に言えば、三宅も伏見も、俺が本当に飯を抜いて昼飯代を浮かし、図書館で昼寝してるなどとは思っていないだろう。俺が末っ子でそこそこの金持ちの親に甘やかされて育ってることを知らないあいつらじゃない。それがわかっていて俺も金欠、と言った。今まで俺が口にしたことのないような言葉だからだ。そうやって俺は「今日はちょっと独りでやりたい事があるんだ」と伝えたし、三宅も伏見もそれを察してくれた。

そういうところを互いに察知しあえるからこそ、俺は数いるクラスメイト、同級生の中から三宅や伏見を頻繁につるむ相手に選んだ。

だからこそ、食堂にも中庭にも顔は出せない。そこに顔を出したとして、三宅も伏見も何も言うことはないだろうが、その状況を避けないほど、俺もデリカシーがないわけじゃない。適度な距離感を保つためにもそれなりの気遣いが必要だ。

俺はトボトボと廊下を歩きながら、いよいよ、本当に図書館に行くかと考えていた。図書館など滅多に行かないし、ましてやこの時間になど一度も行ったことはない。昼休みに図書館で見れる顔はどの辺かと想像を働かせる。ウチのクラスだと野辺さんや梶といったところか。そういえば幸弘も結構図書室っぽいかもしれない。いずれにせよ、普段話した事ないようなラインナップだ。

情報収集には、普段話した事ない奴らに聞くのも悪くはないか、と考えていた。その時。胸ポケットに忍ばせていた携帯電話が震えた。

「ん？　携帯か？」

周囲を見渡し、教師の姿が見当たらない事を確認し、携帯を開く。イルミネーションと共にディスプレイに踊っていたのは、俺の彼女の名前。そう「福沢聖」だった。

噛み合わない会話 - 福沢聖と湯島誠との電話 -

――Ｐｒｒｒｒｒｒ
――Ｐｒｒｒｒｒｒｒ
――Ｐｒｒｒｒｒｒｒ

何度目かのコール音。無機質な電子音ががらんどうな私の頭に響く。携帯を持つ手が重かった。

コール音を耳にしながら、手首の時計に目をやる。時計の針は昼休みを告げている。ちょうど長針と短針が最も離れている一分間だった。互いに背を向け天と地、別々の方向を臨んでいる。淡いピンクゴールドの文字盤できらびやかに時を刻むその腕時計は、去年のクリスマスに誠くんがプレゼントしてくれたものだった。

誠くんの声は聞きたかったが、話はしたくない。そんな複雑な心境だった。コール音の向こう側に誠くんの姿が浮かび、電話に出て欲しい気持ちと、反面出て欲しくない気持ちがないまぜで自分の心がわからなかった。

駄目だ。電話をする前に固めた心構えが崩れていくのを感じた。こんな気持ちで誠くんと喋って平静でいられるわけがない。誠くんが電話にでる前に切ろう。

「もしもし？　聖」

突如消えたコール音に代わりに、耳に飛び込んできたのは他でも

ない、誠くんの声だった。心臓が早鐘のように打ち鳴らされ、しかし、全身の血の気が引いてゆく。

ギュッと目を瞑り、深呼吸。

「お～い？　聖？　あれ？　もしも～し」

溢れる涙を声には出さぬよう気をつけ、口を開く。

「誠、くん？」

声が震えていないか、自分ではよくわからなかった。

「お！　聖？　もしもし？　何、どしたの？　急に電話なんて？」

細身な体格の割に低く、電話などでは少し聞き取りづらい声。今までなんども聞いた誠くんの声だ。

「あ、うん。あのね、こないだの話なんだけどさ」

この声が聞きたくて、なんども夜更かししたっけ。昨日はずっと電話してたから今日昼間居眠りしちゃって先生に怒られた、なんて、懲りずにまたその晩電話したり。

「あ～、すまん。聖。実は今日はまだ、なんも聞けてないんだ。いや、あれだぜ、結構聞き込みしたんだけどさ、うん。マジで」

「そうなんだ。あ、でもそんなに気にしないでいいからね」

「いや、そうもいかないっしょ。堺さんだっけ？　近いんでしょ？

コンクールの出展」

誠くんの口から嘘が漏れる。もちろん誠くんの嘘ではない。私が誠くんについた嘘だ。真実を混ぜて紡いだ嘘が押しつぶされそうな気持ちをさらに抉る。

堺さんは、私が通う美大の予備校で講師を勤めているフリーの映画監督だ。新進気鋭の映画監督の登竜門とも呼ばれているさるコンクールから招待枠を譲り受け、出展をしようと意気込んでいるのだが、いかんせん制作資金に難航し、撮影が中断している。ここまでは真実。

「資金援助の目処が立てば、堺さんを初め、制作関係者である美大のＯＢの人達と顔を繋ぐことができるかもしれないの。別に裏口で美大に入れるとかそんなんじゃないんだけどね、将来的にその業界へ進むことを真剣に考えているなら、そういったことがなにかの糧になるかも」

私は、そう言って誠くんを騙した。誠くんが私の夢を尊重してくれるのを知っていたから。実際は堺さんとは直接の面識どころか、授業で教わったことすらない。コンクール云々の話は講師室のすぐ脇にあるラウンジで小耳に挟んだだけの事だった。

そんな嘘にしかし、誠くんは喜んで協力を買って出てくれた。そしてそんな優しい誠くんを私はさらに騙した。

でね、最近いいお小遣い稼ぎがあるらしいんだ。そう切り出し、私は『自殺ネット』の合言葉探しを誠くんに頼んだのだ。

「ッツクんだよ！　マジで！　ネットに詳しいって話聞いてたんだ

けどな、その根岸ってやつさ。あれ？　もしもし？　聖？　聞いてる？」

「うん。聞いてるよ」

「で～、えっとなんだっけ。あぁ、そうそう根岸の奴が……って違うな。聖に愚痴ってもしょうがなかったっけ」

「ううん。大丈夫だよ、誠くんの話聞いてて面白いもん」

そうだ。誠くんは本当に話が上手だ。とにかく話題が広い。昨日見たテレビの話から、美味しいバナナの選び方まで、いろんな話をしてくれる。絵を描く事しか能がなかった私の知らない世界を面白おかしく教えてくれたのだ。

「マジで！？　そう言われると悪い気しないな～。……って違くね！？　先に電話かけてきたの聖じゃん！　なんか用があったんだろう？」

「うん、えっとね。私もさ、色々調べたんだ、合言葉のこと。それでね。誠くんの学校、多分、二年生だと思うんだけど、「コウメイ」って人居る？」

「コウメイ？」

私は、件の自殺ネットに参加している人間に多数アプローチを取り、合言葉への糸口を探して得られた手がかりを誠くんに話す。

「そうコウメイ。正確にはＫＯＵＭＥＩってハンドルネームの人なんだけどね。その人が、自殺ネットに『合言葉教えます』ってトピ

ックを立ててたりするみたいなの」

「え？　でもさ、聖。その手のトピックやら情報交換みたいなのって、今どこでもやられてるじゃん。こんなこと言うのもなんだけど、そいつが知ってるのが本当の合言葉なのかわからなくない？」

「確かにそうだけど……。先々週の自殺者の人もその人から合言葉を手に入れたって噂があるのよ！」

合言葉の真偽を確かめるのは簡単だ。実際にその合言葉を書き込み、正当なリアクションが来るかを待てばいいのだから。

しかし、そんなことは口が裂けても誠くんには言えなかった。私は苦し紛れの言い訳をする。

「それに。それにね、誠くん！　合言葉の真偽は構わないの！」

「え！？　真偽は構わないって、聖。嘘の合言葉を売って金にするのか？　それは流石に……、ちょっと、あれじゃないか？」

「そうじゃないよ誠くん！　詐欺とかそういうんじゃないの！　売るときには真偽はわからないけど、本当かどうかは、すぐわかるでしょ？　本当に、自殺の段取りが送られてるかで判断できるもの」

「まぁ……そう言えばそうかなぁ」

誠くんの声色には未だ少し得心がいってない様子が感じられた。

「そう、で、真偽がわかった段階でお金のやり取りをすればいいのよ！」

「それも……そっか、なぁ」

少しの間無音を乗せた電波が行き交う。私は努めて明るい声を出し、誠くんの背中を押した。

「そうよ。そのへんはまかせて！」

「あ！」

「え？」

誠くんの一段上がったトーンが急に耳に飛び込んできた。何か口を滑らし、不味いことを言ってしまっただろうか。携帯を握る手にかいた汗が増した気がする。自分の鼓動の音がうるさかった。

「そうだ！　その辺も気になってたんだ。聖は合言葉がお金になるって言ってたけどさ、売買って言うか、相手とのやりとりはどうすんの？」

誠くんの発言は、私の嘘に気づいたものから発せられたものではなかった。安堵と共に、ここから先もボロは出せないと気を引き締め直す。

通話口に手をかぶせると、さっきから枯れることなく溢れる涙を大きくすすって、拭う。泣いては駄目だ。深く呼吸を一回。こちらの様子を悟られないように、何事もなく続ける。

「そのへんは私に伝があるんだ！　娯楽も少なくて噂好きの女子高の女の子の人脈はすごいんだから！」

一気呵成にまくし立てた。これ以上取り繕うのは無理だ。嘘も、涙声も。

「だから、誠くんは、気の向いた時でいいんだ。「コウメイ」って人とかの事を気にかけといてくれれば」

「お、おぉ。大丈夫だ！　その辺は俺にまかせとけって！　な？」

電話片手に、ドン、と胸を叩く誠くんの姿が浮かぶ。多分、本当にそんなポーズを取っているはずだ。

「うん。ありがとうね、誠くん」

人の気持ちがこんなに痛いなんて知らなかった。誠くんの笑顔が。電話越しで本当は見えてなどいないはずの笑顔が私の脳裏で私の心を刺す。

「……」

全部を明かしてしまおうか。そんな衝動に駆られた。全部を明かしたら誠くんは私のことをどう思うだろう。慰めてくれるだろうか。気にするなと励ましてくれるだろうか。それとも。

私のことを嫌いになってしまうだろうか。

それだけは嫌だ。

嫌われることだけは嫌だった。でも。でもこれ以上嘘をついては、私には誠くんと話をすることすら許されなくなってしまうかもしれ

ない。

「……誠く」

「あ！　やべっ！　聖ごめん！　先生が来た！　なんかあったらメール頂戴！　じゃ！」

唐突に切れた電話は救いか断絶か。校内で携帯を使ってるところを先生に見つかりそうになったのだろう。誠くんは矢継ぎ早に別れを告げると、電話を切ってしまった。

語の接ぎ穂を失った私の告白は尻切れトンボになってしまった。中空に放り出されようとした真実は受け止め手を見つけられずに消えていく。

通話を終え、待受画面に戻った携帯の画面を意味もなく見つめる。誠くんの声の残滓が未だ響き残っていた。

鍵の側へと - 湯島誠の昼休み２ -

「だ、か、ら！！　先生の気のせいですよ！　校内で通話なんか！」

聖からの電話を切った後俺は、校内での携帯の使用を咎めてきた生物の和田の追求を必死で躱していた。

正直言って間が悪いと言うか、運が悪いと言うか、とにかくついてない。携帯の持ち込み、使用禁止など、もはや監督する側の教師ですら気にもかけない古びた校則だ。授業中に開けっぴろげに弄ってるわけでもなければ、休み時間に電話をかけていようが怒られることはない。唯一この生物教師、すんぐり体系にカエル頭を乗せた和田を除いては。

生活指導の笹川ですら、形式的に「携帯使うなら俺の目の届かないところでしてくれ～。立場上何も言わない訳にもいかないからな」と言いながら通りすぎるに留まっているのにも関わらず、和田の面度臭さと言ったら。だから女子から「キモガエル」なんて呼ばれるんだよ、と心の中で毒を吐く。

「い～や、俺は見たぞ、湯島！　持ち込みだけならいざ知らず、校内で通話とはいよいよ許せんな！」

なにが、持ち込みだけなら、だ。例え通話してなくとも、持ってるのを見かけただけで、鬼の首を取ったように咎めてくる癖に。

幸い去年の一年間生物の授業で顔は合わせたものの、今後の俺のカリキュラムに生物はもう登場することはない。生徒から嫌われぶっちぎりだけでなく、教師間の評判もあまり良くないという噂の和

田は、担任も持っていない。

つまり逃げるが勝ちだ。

「マジ、俺関係ないんで！」

そう一言。言い放つやいなや俺は和田に背を向けその場を離れる。もちろんダッシュで。

一瞬虚を突かれたのか和田が一拍置いて怒鳴り声を上げた。

「おい！！　あっ！！　コラ、湯島！！　待てって、湯島ァ！！」

刻一刻と小さくなる湯島の怒声をＢＧＭにしながら、二段飛ばしで階段を駆け上がる。閑散とした旧校舎の廊下を走り抜けながら、俺は先程の聖との会話を思い返していた。

聖がくれた手がかり。正直言って、どう使っていいものか、悩みどころだった。話しかける奴に誰彼構わず「ねぇ、ＫＯＵＭＥＩってハンドルネームで自殺ネットやってたりしない？」なんて聞いて回るわけにはいかないだろう。援護まで受けて聖の期待に応えられないという情けない姿は見せたくないのだが。

先を見通せない悩みを抱えながら廊下の角を曲がり、カエルの鳴き声が聞こえなくなったところで、歩を緩める。裏庭に茂った木々の間を抜けた爽やかな風が吹き抜ける渡り廊下を超えれば、そこは御坂学園高等部中等部兼用の図書館だ。

ミサ高、と皆は呼ぶ御坂学園高等部の敷地には図書館が二つある。一つは俺がこれから行く図書館。もう一つは俺たち御坂学園生の乗

るエスカレーターの先、敷地を同じくする坂嶺大学の図書館だ。

中高の図書館は大学の図書館に比べ、蔵書は数分の一。コピー機や検索機を始めとして設備も見劣りし、しかも、今では移動教室ぐらいでしか使われなくなった旧校舎を抜けた先のどん詰まりに鎮座してあるとあっては、当然利用者数が少ない。中等部、高等部の生徒が大学の図書館を利用するためには一度申請手続きをし、利用許可証を発行しなければならないという煩わしさを考えても、尚だ。

事実、俺も、この図書館に来るのは二度目か三度目。授業に関係なく来るのは初めてだ。

カウンターに座っている、目が開いてるんだか閉じてるんだか分からない爺さん司書の脇を通り、フロアへ出る。適度に空調の効いた涼し気な空気に、図書館特有の紙の香りが混じり、鼻に抜けた。

御坂学園図書館は一階二階吹き抜けの二層構造になっている。出入口があるのは二階で、借返カウンターの他には雑誌や新聞の陳列されたラック。それらを気軽に閲覧するために窓際に設えられたソファ。奥に行けば、映像や音声資料を参照するための個室ＡＶルーム。それとえーっと。一年の入学時に受けた校内ガイダンスの記憶を探りながら周囲を見渡す。

メインの書架と机が立ち並ぶのは一階部分だ。二階の欄干に持たれ、階下を見渡す。

「お！　結構人居るんだな！」と、つい思ったままに声が漏れた。

途端、一番近くの席で本を広げていた女子生徒が顔を上げ、怪訝な表情でこちらを見咎める。

慌てて口に手をやるが時すでに遅し。何人か女子生徒に続いてこちらを伺う顔がちらほら。思わず口を割った俺の言葉は、先程までカエルとやりあっていた時の音量のままで、図書館に響いてしまったようだ。そりゃ睨まれても仕方ない。

俺はその居心地の悪さに視線から、逃げるようにして下のフロアに降りる階段の方へと移動する。

それにしても。階段を降りながらもう一度、一階を見渡す。

そこには両手の指どころか、両の足の指を使っても数え切れぬほどの生徒が居眠りや、勉強や、読書など各々の昼休みを過ごしていた。

本が好きな人間というのはやはり一定数居るのだろうか。それとも閑散としているという印象が逆に人を呼ぶのだろうか。昼休みの図書館は、俺の予想に反して意外と盛況だった。

盛況なのは結構だ。話を聞きたいのだから、たくさん人が居た方がいいに決まってる。それも、こんな天気のいい日に外で騒ぐでもなく、紙の匂いが立ち込める空間を好き好んで住処にしている類の連中に話が聞けるのはありがたい。偏見かもしれないが、そういった奴らの方が「自殺ネット」に縁が深そうな気もするし。

しかし、だ。

「私語厳禁。館内はお静かに」

と、来たか。だよなぁ。一階のフロアに降りていく階段の脇に貼

られた注意書きを見て、俺は途方に暮れた。もちろん、今のため息混じりの愚痴の音量は抑えてある。

有益な情報を持ってる人間がいても話しかけられないんじゃ、聞き込みどころではないではないか。少し冷静になって考えてみれば、当然とも言える状況なのだが、俺は落胆を隠せなかった。

自分の身長をゆうに超える書架の林を合間を縫ってトボトボと、俺は途方に暮れていた。

一階のフロアを当て所なく半周し、いよいよ「ＫＯＵＭＥＩって知ってる？」と声を掛けて回らなければいけないのかと思い至った時、ふと書架の列が途絶え、目の前に分厚いドアが現れる。

ちょうど、顔の高さ。百六十センチくらいのところに二十センチ四方程度のガラスの小窓が設えられた木造のドア。構造的に、二階にある図書館の入口から最も離れた位置に設えられたそのドアは、小さな小窓の上に「談話室」と銘打たれたプレートを掲げていた。

「談……話室？　そんなのあったっけな？」

一年半ほど前に受けた入学ガイダンスの記憶を辿り、談話室の存在を思い出そうとしている。

カチカチ、と時計の音だけが響く静かな図書館の空気の中で、じっくり記憶を探るが、俺は結局談話室の存在を記憶から引っ張り出すことに失敗した。しかし、思い出せない理由はわかった。そもそも知らないからだ。

というのも、俺は一日がかりで学校の施設を案内される入学ガイ

ダンスに午前中の時点で早々に飽きを覚えてしまい、午後のルートに組み込まれていた図書館に着いたときは退屈を極めていたため、まともに説明に耳を傾けていなかったのだ。たしか担任の目を盗んで、クラスメイトの群れから失礼し、ＡＶルームで雑誌を広げていたような。

ともあれ、この談話室は地獄に仏だ。ここなら、気兼ねなく会話ができる。

と、思いかけて、声を出しても咎められないことと、図書室で縁もゆかりも深かろうはずもない奴にいきなり「自殺ネット」の話を切り出すことができることは全然微塵もさっぱりイコールでないことに気づく。

ドアの小窓を覗き、中の様子を伺ってみる。真っ先に視界に入ったのは雑誌を広げ数人で談笑にふける女子たちだった。防音の構造になっているのか、口の動きや様子から会話に花が咲いていることは見て取れるが、その内容は聞き取れない。

視線を移せば、イヤホンを着けて机に突っ伏すもの。携帯で電話をかけるもの。堂々とゲームに興じるもの。

どうやら、ここは知る人ぞ知る、教師の目の届かぬ聖域のようだった。

重く手応えのある扉を開け、無法地帯の喧騒を図書館の中に漏らさぬよう素早く、中に入る。

先程までとは一転、俺の気分は晴れやかだ。ここなら、中々良い話が聞けるかもしれない。

真実の対価 - 関口孝明と湯島誠との会話１ -

センセーショナルな好奇心を煽ごうとする題字のセンスにチープさを感じたが、やはり記事の内容にも別段興味を惹くものは見受けられなかった。

もはや、新聞から井戸端会議まで、話題に登らない日はないと言うほど高校生連続投身自殺事件は良くも悪くも隆盛を極めている。警察はこの事件の捜査状況に情報管制を敷いていた。模倣犯や愉快犯などを刺激しないようにとのことだが、例えそうだったとしても、進展が明るければ、警察が自らの活躍を喧伝しない理由など無い。

つまり、捜査状況も明らかにされず、情報に飢えたマスコミ、一流新聞社から三流ゴシップ誌に至るまでが情報を垂れ流してる状況というのは、まだまだ自殺者が増えることを示唆している。

そういった状況は、連続自殺に対しての種々の論説を活性化するのでありがたくもあるのだが、些か粗製乱造の感が否めない。

ロビーのラックから見繕ってきた雑誌を閉じて机に放る。そこで初めて目の前に座る人物の存在に気がついた。

「よう、関口」

随分と人好きのする笑顔が机を挟んで僕を見ていた。

「あれ、俺のことを憶えてない？」

声をかけられ無言を保っていた僕の態度を怪訝に思ったのか、自

らの存在を訪ねてくる笑顔の男。憶えてないかだって。憶えているとも。去年同じクラスだった湯島誠だろう。憶えているからこそ、僕は返す言葉に困っているんじゃないか。

湯島誠。去年のクラス一年C組のクラスメイトだ。

「覚えてるよ、湯島くん」

そう覚えてる。

昼休み、閑散としがちな図書館の奥の談話室で、独り雑誌を読みふけってる僕に話しかけるような奴じゃ無いと判断できるくらいには。たしか昼休みは中庭のバスケコートなんかによく居たような気がする。図書館からの帰り、渡り廊下からそのよく目立つ細身の長身を何度か見かけたことがあった。

「お、そっか。よかった。いやぁ、関口とはそんなに仲良くしてたって記憶もなくてさ。あ、もちろん、忘れてた訳はないんだけどな。いや、ほんと。でもお前が俺の事を忘れてても仕方ないかなぁとは思ってさ、一瞬」

僕の反応も待たずに、湯島は一息で随分としゃべる。口に出さなくても良いような事までべらべらと。とは言え、そう言った振る舞いを咎められない奇妙な魅力を持っている奴だったな、と徐々に記憶の中の湯島の人間像が結ばれていく。

人望か。人徳か。とにかく湯島は顔の広い明るい奴だ。それ故に僕とは大した交流もなかったのだが。

「で？　なんか用？」

僕はぶっきらぼうに、そう切り出した。別に湯島に嫌悪感を抱いてるわけでもないのだが、仲良くも無い僕に話しかけるのには理由があるのだろう。

湯島の用が興味を惹くようなら耳を傾ければよい。そうでなければ突き放せば良いだけのことだ。細かな社交辞令は不要だ。そう思った上での発言だった。僕と湯島はそういうのが求められる仲じゃない。少なくとも僕はそう考えている。

僕の言葉に、湯島の顔から笑顔が消える。一拍おいて、再び湯島の顔に笑顔が宿った。気のせいだろうか、その笑顔からは人好きのする感じが薄れた感じがする。

「ははは、いきなり仏頂面で何の用？　と来たか。いいよ。いいよ、その反応、関口」

突如笑い声をあげる湯島。三日月型に歪んだ口から漏れる笑い声と僕に対する反応。それが、僕には、僕を誉めているものなのか、嘲っているものなのかの判断がつかなかった。

「まぁ、いいや。気にするな。こっちの事だ。で、えー、あ、そうそう。用件だったな。そう、用件。それが重要だ」

本当に自分がなにを喋ろうか本当に把握してるんだろうか、こいつは、と僕はどうでも良いことを考えていた。あー、とか、えー、とか、とにかくセンテンスに間を置く、湯島のその独特のしゃべり方は、まるで思考のスピードが言葉のスピードに置いて行かれているようだった。

早口の湯島は、一転口を紡ぐとこちらを見据えた。

「それだ。それに関して、用あるんだよ、関口」

湯島の突き出した人差し指は、僕の脇に無造作に積まれた、図書館のラックの雑誌の数々を捉える。

別段、交流も無い僕に、明るい人気者のムードメーカーが話しかけてきた理由。

「あ、そうか。悪いね、独り占めしてた」

慌てて、散らばった雑誌を集め、整えると、湯島の目の前に差し出す。

「もう、読み終わったんだ。ちょうど返しに行こうと思ってた所なんだけどね」

僕が渡した雑誌を一瞥もせず、こちらを見据えた視線を動かさない湯島。

「なんか面白いことは書いてあったか」

湯島が三度笑った。今度は気のせいではなかった。その笑顔に人の好意を集めるような爽やかさなど一片も含まれては居ない。

別段、交流も無い僕に、明るい人気者のムードメーカーが話しかけてきた、本当の理由。

「自殺ネットとか、さ。詳しい？　関口」

先ほどまでの明るい口調はどこへやら。重く低い言葉で、湯島は用を切り出してきた。

僕は、湯島のうっすらとだが湯島の用を察し始めた。それは、僕について「自殺ネット」のことを訪ねるということ。しかし、未だに理解できないものもある。

それは湯島の真意。

なぜ、僕に自殺ネットのことを訪ねてきたのか。それで、湯島はなにを得たいのか。

それがわからないままに僕は、どのように答えて良いものか、結論を出しあぐねていた。

「ははは、そりゃ困るよな。急にそんなこと聞かれても。でもさ、教えて欲しいんだよ、自殺ネットのこと。例えば……合言葉とか……さ。知ってたりしないか……？　知ってそうな奴でもいいんだ、な？　関口」

一つ一つのセンテンスを区切って、ゆっくり、僕を見て、問いただすように話す湯島。

「知らないってことはないよな？　その雑誌、特集で自殺ネットを報じてある奴ばっかりだろう？」

なぜ、そんなことを知っているのかは考えるまでもなかった。湯島も興味があり調べているのだ、自殺ネットについて。

そう、湯島、も、だ。僕も自殺ネットに関心を抱き、調べている。その正体、仕組み、そして、その存在の意図を。

湯島はなぜ、自殺ネットに興味を抱いているのか。単純に考えれば、自殺を望んでいるから、ということになるのだが、どうにもそれは腑に落ちなかった。

湯島が自殺を望んでいるような人間にどうしても思えなかったのだ。

もちろん、周囲の人間が、それも特別親しい訳でも無い人間が、そのあたりを簡単に判断できるものじゃない。自殺の種が根を張っているのは、心のそんな浅い部分じゃないのだ。

たかが一年間のクラスメイト。それも、毎日教室という空間で顔を合わせていただけの僕に、湯島の心の浅からぬ所など窺う術はない。時に、それは、親兄弟、恋人、教師、さらには、自分でも知ることの出来ないものなのだから。

それを、ハンドルネームを使って自殺ネットに参加し、様々な情報を得ては多くの自殺志願者とコミュニケーションを重ねてきた僕は経験的に知っていた。

ふと、なぜ、湯島がこの僕に、話を持ちかけてきたのが気になった。僕の自殺ネット上でのＫＯＵＭＥＩというハンドルネーム、そしてその行いのいくつかをどこかで見聞きしたのだろうか。

「湯島くん、自殺ネットって、あの、今話題の連続投身自殺の裏側にって噂の？」

僕は、湯島にジャブを放った。

なにもかもを掴みかねていた。わかっているのは湯島のとった手段のみ。即ち、僕に問いかけたという事。その手段をとった理由も、それによって達したい目的も、湯島の食えない笑顔の向こう側だ

事はデリケートな話題に及ばざるを得ない。湯島からしてみれば自身の身の上にも関わってくるはずだし、なにより僕だ。自殺ネット上の僕の行動、自殺志願者にある条件を対価に知り得た合い言葉を教えるというのは法的にもギリギリか、さもなくば抵触しているかもしれないのだから。

いかにして、互いの意見と真意時には隠し、時には偽って、話すり寄せていくか。そのためのジャブだった。

しかし、僕の試みは湯島相手に空を切る。

それまでの笑顔から、眉根を寄せ不快感を示した湯島はデリケートな部分を、あっさりと突っ切った。

「そういうのいいじゃん、関口。知ってるの？　合い言葉。教えてくれるの？」

そういうの。薄氷の上の僕の歩みを、互いのプライベートな心の内側をチップにかけた駆け引きだったはずの綱渡りを、「いいじゃん」と一言言ってのける湯島のその脳天気さ。それに僕は、困惑するとともに、興味を惹かれた。

それは偏に、湯島誠という男を、僕はどこかで一目置いていたからだと思う。つまりその脳天気さが本物の脳天気なものでなく、湯

島の意図に裏打ちされた演技であると踏んだのだ。

湯島誠はそういう腹芸ができる男だと、去年一年間で僕は値踏みしていた。裏表なく天真爛漫なムードメーカーというキャラクターを背負っている湯島だが、八方美人を嫌味なく実行出来るというのは相当に頭がよく、コミュニケーション能力に長けていなければ不可能だと思う。事実僕にそんなことができるとはコレっぽちも思わない。

そんな湯島が脳天気な仮面を被って、僕に問いたいのは何故だ。僕の中で好奇心がかま首をもたげる音を聞いた。

今まで僕が自殺志願者に合言葉の対価として求めてきたのは、答えだった。問いかけるのは二つ。

なぜ死にたいのか。

自殺をどう思うか。

その二つを語ってもらった。これから亡者になろうとする人間の心の内を聞かせてもらうことを合言葉の対価として求めたのだ。

お決まりのいじめ等の悲劇を語る者も居れば、今の生に不満を覚えていないながらも、これから旅立つ死者の世界に根拠無き幸せを見いだしている殉教者も居た。

そこには、人間が見えた。その人間を取り巻く環境が見えた。なにが彼女に自殺を選ばせたのか。喜び勇んで亡者の国へと身を投げた彼が、煉獄の狭間になにを見出しのか。そして、なによりそんな彼らの向こう側。間接的に彼らを殺した自殺ネットというものがな

んなのか。

それを聞くことが僕の関心だった。その関心が、心中を窺いしれない湯島を前に疼く。

「湯島君、合言葉を教えるのには条件があるんだ」

今度は僕が笑った。

差し出された対価 - 関口孝明と湯島誠との会話２ -

時計の針は十二時を回ってしばし。昼休みはまだ三十分近く残っていた。

談話室の一番奥。この時期は日差しが強く、誰も好んで座らない奥まった窓際の席に湯島を促すと、僕はゆっくりと口を開いた。

「ここなら、よほどの大声じゃない限り周りに話を聞かれることはないよ」

僕の話をよそに、きょろきょろと物珍しそうに周囲を見渡す湯島。

「おぉ、確かに。こりゃ、そういう話向きな場所だ」

そういう話。そう、これから僕は、湯島とあまり人に聞かれたくない類の話をするのだ。

「で？」

湯島はひとしきり周囲を見渡すと、僕の方に向き直る。机に肘をつき、交差させた手は口許へ。指の隙間から覗く笑顔には、やはりなにか仄暗いものを感じる。

僕が心中に抱いた不気味さを知ってか知らずか、湯島は楽しそうに続けた。

「教えてくれるんだろう？　合言葉」

その不気味さに呑まれることの無いよう、僕は気を引き締める。湯島は、「その気は無い」と言っていたが、面と向かっての腹のさぐり合いで僕は湯島に勝てる気がしないからだ。

「言っただろう、条件があるって」

意識してゆっくり、値踏みをするかのごとく、話す。

「結論からいうと、僕は合言葉を知っている。それも多分最新のをね。さらに言えば、その合言葉はまだ誰にも教えてないものだ」

顔の下半分を重ねた手で覆い、表情を窺いづらい湯島だが、その柳眉がピクリと動いたのを僕は見逃さなかった。なにか不味いことを口にしたか。一瞬猜疑に駆られ、口を噤む。

湯島が表情を動かしたのも、それきり。無言のままこちらを見つめ、先を促す態度を崩さない。僕はその沈黙に居心地の悪さを感じるが、己が好奇心の欲望を優先し、説明を続けた。

「もっとも、合言葉の真偽の方は実際に使ってみないとわからないけどね。それでもいいというのなら……」

語尾を濁しながら、今度は僕が黙し、湯島を見つめる。

「いいよ、それで」

肘にかけていた体重を逃し、身を起こすと、頭を掻きながら応えてくる湯島。

「で？　条件ってのは？」

「聞かせて欲しいんだ」

「は？」

間髪入れずに応えた僕の反応に、一瞬だけ戸惑いを見せる湯島。すかさず、僕は説明を続けた。

「聞かせてほしんだよ。なんでその合言葉が聞きたいのか」

「……」

「その合言葉で……なにをするのかを、さ」

「それが条件。お前が望むことなのか？」

「……そうだよ」

僕は大げさに頷いてみせた。

その様子を湯島はどう受け取ったか。再び、手を口許に添え、俯いてなにやら考えている。

僕と湯島の間に流れる沈黙を切り裂くように談話室の喧騒が微かに響く。嬌声を上げる女子生徒たちだ。

側に備え付けられた大きな置き時計の時間を刻む音が、賑やかさの向こう側に追いやられ、時間の間隔が薄れた。

しばらく黙り込んだ末に、湯島は俯いたまま口を開いた。

「仮に……」

「うん？」

「仮に、だ。俺が話したとして、それがお前が聞きたいと思ってる話じゃないかもしれないぞ」

僕の出した条件を明らかに訝しんでいる湯島。と言うよりはさっきまでの僕と同じか。真意をつかめずに困惑してるのかもしれない。

そんなことしてどうなるのか、と。

僕はその答えを明かす事にした。変に警戒されて方便に逃げられても困るからだ。

今までにも偽りの身の上を話してきた自殺志願者が居なかったわけではない。しかし、わかるのだ、そういった嘘は。

自殺に踏み切ろうかという人間の心中など、そうそう偽ることの出来るものじゃない。そういった嘘は有り体に言えば薄っぺらだった。リアリティがなかった。救いを願う悲痛さに欠けていた。

そう、そこには死の臭いがしなかったのだ。

多くの自殺志願者の話を聞いてきて、僕にはそういった嘘を見抜くことが出来るようになっていた。やっかいなのは、だからといって僕にはどうする事も出来ないことだ。

わかったからといってどうこうできるものでもない。嘘だ、と糾

弾したところで、本当だよ、と開き直られればそれでおしまいだ。相手の心の奥底など一度閉じられてしまえば暴きようもないのだから。

「話の内容は湯島君が気にすることじゃないよ。僕が求める対価は話してくれることだけだ。その内容がどんなものであれ、僕は合言葉を教えることを渋ったりはしない。……例え、それが、嘘、であってもだ」

先の先で釘を刺す。湯島に本当に話す気がないのなら、こんな牽制なんの役にも立たないが、しないよりはましだろう。

依然湯島は俯いたまま顔を上げない。

「話した内容は、他人には、」

「もちろん口外しない！……これも僕を信用して貰うほか無いけど」

「……」

「……」

まるでジリジリと空気が音を立ててるかのような焦燥感を覚える。遠くの喧噪をＢＧＭに僕らの間に浮かぶ沈黙は、やがて、ぽつりと口を開いた湯島によって破られる。

「もしかしたら、こんな話、お前が聞きたいものとは違うかもだけどな。俺はさ、金が欲しいんだ」

突如語られた湯島の告白は今まで耳にしてきた自殺志願者の告白

とは、少し毛色の異なるものだった。

突如現れた、金、という単語と自殺とがすぐには結びつかずに混乱してしまう。説明の続きを待つが、湯島は再び口を噤んでしまう。

疑問を宙ぶらりんにされた僕は、少し頭をひねる。金が欲しいから死ぬ。

まもなく、一見繋がらないように見える二つの事柄を結びつけるキーワードに思い至った。

臓器売買。

この世界は、聖職者や政治家やロビイストが謳うような平等さを、残念ながら備えてはいない。その最たるものが命だろう。

貧しい物は命を全うすることを許されず、富を持つ物は不必要なまでに贅を尽くす。

日本で衣食住に困ること無い僕が言うのもなんだが、貧困による飢えと先進諸国の飽食ですら、その歪つさは苛烈を極める。金と命を天秤に乗せる行為に至っては凄惨の極北だ。

生きている人間の健康な臓器を不健康な金持ちが買う。こうして金を媒介に命の灯火が譲渡される。一方的な強弱の関係の基に。

フィクションの世界で見聞きはしていた。そういう世界も現実にあるのだろう。

しかし、現実感がなかった。湯島がこれから足を踏み入れるのは

そういう世界なのか。

意外で、そして僕の範疇を越えた世界の存在に驚きながら、わずかに残った冷静さが異論を唱えた。

自殺ネットが行ってくれる自殺は投身自殺だ。死体の損傷も激しいし、警察の目にも触れやすい。臓器売買といった類に利用する死に方としては適さないのではないか。

沈黙を守る、湯島に思い切って質問をぶつける。

「あのさ、えっと、それってさ。わざと死んで、死体をお金に換えるとか、そういうこと？」

体を横に向け俯いていた湯島の体がピクンと動くと、ゆっくり顔があがる。黙ったままこちらを見つめる湯島。

悠に数秒の間を置き、再び俯くと、口を開く。

「そうだよ。お前だって聞いたことあるだろう、映画やらで。人身売買とか臓器売買って言われてる奴さ」

やっぱりか。予想が的中したことに反して、僕の心は沈んでだまだ。すかさず、反論が口をついた。

「でも！　自殺ネットは投身自殺だ！　死体の損壊も激しいし、これまでも遺体はすべて回収されてるって聞いてる！　遺体から臓器が抜き取られてるなんて話は聞いたこ、」

「今回初めてやるんだから、そりゃ聞いたことないだろう」

「そんな……ことって」

「死体の損壊も大した問題じゃないし、警察の検死も問題ない。必要なのは肉体の一部だからな。ダミーを混ぜておけばバレやしない」

「一部？」

「眼球だよ」

そう言いながら、湯島は僕の目を視線で射抜いた。

思わず僕は目を反らしてしまう。

「気分の悪い話だろ。やめるか？」

湯島の言うとおり激しく胸くその悪くなる話だ。そして、なんで、そんな事を平然と言ってのけるのだろう。この目の前の男は。

僕は、食い下がる。狼狽えている事に対して虚勢を張りたいせいもあるし、もっと事の微細に突っ込みたいという好奇心もあった。

「いや、続けてくれ」

そう言うのが精一杯で、僕はもう湯島の目を見ることができなかった。訥々と湯島の口から語られる残忍な話をただ受け止めるのみだ。

「眼球はかなり需要がある。でもな、それは有名な角膜移植なんかの話じゃない。眼球、って言うか視神経って奴は実にデリケートで

な。素人がそいつを傷つけない用にちょいちょいと引っこ抜くなんて芸当は、まぁ当然だけど、できない」

「闇医者とか、そういうのか？」

「そんなんじゃないさ。って言うよりもそんなレベルの高度な医療技術を持った闇医者なんていない」

湯島は饒舌に続ける。

「現代の医療は機械の医療だ。様々な医療機械が困難な施術を可能にするわけだが、闇医者はそんな上等な医療機械を手に入れることはできない。術式の情報のフィードバックとか、医師の情報管理とかまぁ目的は色々あるわけなんだけど、現代の医療機械にはその精密さや値段等を勘案した等級が付けられてて、一定以上の等級の物に関しては購入者から使用履歴まですべてが、厚労省を中心とした文科省経産省なんかの複省出向機関ですべて管理されてる」

「……」

「闇医者はＭＲＩどころか、レントゲンだって持てやしない。おっと、話が逸れたな。そんな訳で抉りだした眼球は医療用になんか使えない。そんな眼球もって病院に行ったら即お縄さ」

「じゃあ、一体な、」

「飾るんだよ」

「そんな！！」

「ありえないか？　でもそう言った腐れた趣味を持つ輩はごまんと居るぜ。しかもこぞって金持ちと来てる。俺はそう言う奴らに、」

「売るのか？　金のために命を投げ打ってまで！！」

「……は？」

「そんなことして何になる！　それともなにか、そうまでして返さなきゃいけない借金でもあるって言うのか！」

僕は声を荒げていた。遠くでおしゃべりに興じる女子生徒達が、話を止めこちらの様子を伺っているのが、横目に見えたが、それでも止まらない。

自殺は。自殺ネットは金とか人身売買だとか、そんなくだらない物に使われていいようなものじゃない。

あれは、もっと。もっと。

仮面の下の悪意 - 関口孝明と湯島誠との会話３ -

僕の中で憤懣が暴れる。

今でも覚えている、連続投身自殺事件の裏に自殺ネットの存在があることを知った時の興奮。この先きっと忘れることはないだろうあの感動。僕はその時こんな前向きで健気な仕組みは他にないと思った。

自分でも何と言っているのかわからない。誰に伝えていいのかもわからない。そんな絶望を鮮やかに表現できる最高のツール。そう確信した。

「自殺ネットは、自殺ネットで死ぬことはテロなんだ！　生きる意味も与えられず、死ぬ権利も与えられない人間達が！　誰かに、社会に、国に、この世界がこんなにも歪んでるんだって、大きな声で叫ぶためのメディアなんだ」

「お、おい」

僕はもう黙っていられなかった。湯島の目を見て、僕は内心をぶちまける。

自殺ネットを調べてきたのはその行為が導き出す意味に共感してきたからだ。僕自身、死にたくなるほど、周りのなにもかもに辟易してて、でも、恨み方も、敵の見つけ方も教わってこなかったからどうしたらいいかわからず。生きるのは楽しくないのに、死ぬ勇気も与えてもらえずに。

そんな日々にあって、自殺ネットは明確な意志を持っていた。確実に、システマチックに死ぬ、という明確な意志。生の否定、死への渇望。それが自殺ネットには感じられた。それは僕がのどから手がでるほど欲しくて、でも手にする方法がわからなかったものだ。

「僕は、そのメディアで、自らの命を懸けて叫ぶ人たちを支えてきたんだ！　今まで死を望んだ人たちは、死へと追いやられた人たちは、それぞれ考えはあったけど、皆一様に生と死に正面から向き合っていた人たちだった。それなのに、君は！　眼球で一個で幾らになる？　セットで幾らだ！　借金なんて自己破産でも何でもすればいいじゃないか！　自殺は極地なんだ。生と死の狭間をたゆたった人間が最後に着くところでなければいけない！」

僕がまくし立てている間、湯島はずっとこっちを見ていた。僕も湯島から目を反らさない。

「おいってば！　関口！　さっきから勘違いしてるぞ、お前。俺は自殺なんかしないし、当然目も売らない。合言葉を使って自殺者をおびき寄せるだけだ」

今までで一番意味が分からなかった。こいつは何を言っているんだ。。

「お前が小難しくご大層なことを考えてるのはよーくわかった。でもな、そんなこと俺は知ったこっちゃない。金が欲しくて、金になるものを持ってる奴が居て、で、そいつがそれを捨てるって言うんだ。拾って何が悪い」

なにも口にできない。反感はわいてくるのに、それを表す言葉がでてこなかった。僕らの想いを踏みにじる禿鷹みたいな奴を前にし

て、何も言い返せないのがひたすらに悔しかった。

「君が、やっているのは営利殺人だぞ」

ようやく口を付いてでたのはそんな情けない糾弾だった。

「違うね。自殺だよ。自殺したい奴が自らの意志で自殺に臨むんだ。それが自殺でなくて何だって言うんだ！　そこに誰かの意志や思惑が介在するのが悪いなら、自殺ネットの存在だって悪だ。死ぬことを知りながら合言葉を教えてるお前だって悪だ！」

「違う！　僕には大義がある！」

「俺にもあるさ」

黙れ。

「無い！　君にあるのはただ薄汚い欲望だろう！！」

「お前のがそうじゃないと何故言える！　自殺した奴には、自分の死にそんな大義名分をかぶせて欲しくなかった奴だっているかもしれないぞ」

頼むから黙れ。その薄汚い口をそれ以上開くな。

「そんなことはない！　間違ってるんだ！　高校生が、僕ら若者が死にたくなる世の中なんて！」

「俺は死にたくなんかないぞ。世の中が間違っているなんて思ったこともない。友達と、三宅や伏見とバスケして、彼女とデートして、

テストでそこそこ言い点取って鼻高々になって、毎日楽しくてしょうがないね！　そんな俺の世の中までお前に勝手に否定される筋合いはない！　お前は、お前等はただ、巧くいかないことを誰かの所為にして、責任逃れをしてるだけだ！」

卑しい魂が垂れ流す、その呪詛を何とかしろ。ガサガサに鱗だった舌で無遠慮に人を舐め回すような、そのおぞましい言葉の数々を全部飲み込んで内蔵を腐らせてしまえ。僕の生に、僕らの生に意味なんて与えられなかった。僕とお前とで何が違ったって言うんだ。男がいて女がいて、そこに愛があって、それで人は世代を紡ぐんじゃないのか。何故持つ者と持たざる者が生まれんだ。僕が笑えないんだから、それはつまりこの世界がクソッタレだってことに決まってるじゃないか。

「自分が正しいから、僕が間違ってるっていうのか！」

「お前がそれを言うのか！　俺は、俺からは一度もお前の考えを否定なんてしちゃいない。テロ結構。世直し結構。俺はただ、知ったことか、と言っただけだ。お前が大義の前に自殺ネット上でどんなに暗躍しようと構わない。死にたくなるくらいこの世界に嫌気がさして居る奴がわんさかいようが、そいつらが勝手に死に踏み切ろうが一向に結構。お前等が好きにして、俺が好きにする。ただそれだけだ」

自殺は生の誇りを掛けた尊い営みだ。死者の魂を生者に刻むのだ、決して拭えぬ刻印として。全身全霊を込めて生き、そして死へ踏み出した持たざる僕らの心意気を、意志を、意味を墓標に変えて、社会に突き立てるのだ。

違うんだ。違うんだよ湯島。お前は何もわかってない。何も見え

てない。

数千の文字で紡いだ百を超える文章が大音量で脳内に響く。しかし、それは声帯を震わせることはなく、言葉になり損ねたまま、脳裏で消える。

僕はついに湯島に何も言えなかった。拳を固く握って俯くことしかできなかった。

ガタリ、と音がした。湯島が席を立ったのだろう。僕は仕方なく、ゆっくり顔を上げる。

「話はここまでだな。もうこれ以上聞きたいこともないだろ」

湯島は財布からレシートの切れ端を取り出すと、談話室の机に転がっているボールペンでなにやらそこに書き込み、僕に差し出してきた。

「興奮して悪かったな。合言葉教えてくれる気があるなら、ここに頼む」

僕はそれを受け取らない。それどころではなかったから。崩れさった僕の中の何かの欠片を集めて組み直さなければ。

僕は情けないことに涙をこらえるのに必死で顔を上げていることすら辛かった。

メモを受け取らずに居ると、湯島は机にそれを残して背を向ける。

「もう昼休み終わるぞ。五限遅れちまう」

その言葉を最後に、湯島は談話室を跡にした。

僕がそこから動けずにいた。今一度、自分の思い、信念に、問いかける。自殺とは何か。

帰ってきた答えは自信あふれる思いでなく、昼休みの終りを告げるチャイムだった。

僕は、どうやら携帯のアドレスが書いてあるらしいメモ書きを眺めながら、そのチャイムをぼんやりと聴いていた。

絶望と希望の隔たり - 湯島誠の独白 -

図書館を後にした渡り廊下で俺は、何とも言えない厭な気分に苛まれていた。

何から考え、何を喜び、どこを反省して、どう受け止めるべきか。

まず、関口が当たりだったこと。これは一言、ラッキーだった、に尽きる。

談話室に入り、ターゲットを探して視線をさまよわせていた俺の目に飛び込んできたのが、関口だった。

去年クラスメイトだったよしみと、根岸同様ネットやアングラの世界に詳しそうな奴だった気がする、という俺の中の関口の印象が背中を押した。そして、次に目に付いたのが関口が長机に所狭しと並べた、ゴシップ誌、週刊誌の数々だった。

それの雑誌にどんなことが載ってるのか。合言葉や自殺ネットに関して情報を仕入れるためコンビニの雑誌コーナーをしらみ潰した俺には、それがすぐにわかった。

だから、かまをかけ、それは功を奏した。今になって考えてみれば関口「孝明」が「ＫＯＵＭＥＩ」というのもチープすぎて話のネタにもならないオチだ。

しかし、オチが巧いか巧くないかはこの際どうでもいい。

その後、あいつが対価に求めてきた珍奇な条件にも我ながらよく

すらすらと嘘を並べ立てられたものだ、と思う。
一瞬聖の事も含めて全て正直に話すことも頭をよぎった。しかしあの時点で関口の奴がなにを考えているのかもよくわからなかったし、名前を伏せるのはもちろんの事、聖のことはその存在の一片すらも匂わせるのは嫌だと思った。

それ故の方便だったのだが。

賢そうに本を開いて居るイメージの強かった関口だったが、正体はと言えば随分いびつな精神をした誇大妄想家だったという印象だ。人身売買なんて話をすんなり信じるあたり、物を知っている癖に、変なところで周りや現実との折り合いをつけられて居ない雰囲気を覚えた。

正直に言えば俺の嫌いなタイプの人間だ。ああいうのは往々にして自己肥大のコンプレックスで首が回らなくなってるケースが多いことを、俺は経験で知っていた。有り体に言えばガキなのだ。

そんなあいつが、というより、だからこそ、と言うべきか。俺の方便に随分真剣に食いついてきた。あまりにも神妙に俺の話に耳を傾けるものだから、ついつい俺も口からデマカセを並べ立ててしまった。

しかし、あんなデタラメがあいつのすがる歪つな信念の逆鱗に触れるとは。

旧校舎を出たところで俺の足は教室でなく、保健室へ続く廊下を向いていた。どうせ五限はノートを丸コピすれば八十点はとれる古典だ。

頭痛がするとでも言ってベッドを貸してもらおう。頭が痛いのはあながち嘘でもないし。

そうと決め、保健室のあるい一階へと、階段を下りながら、俺は関口の逆鱗に思いを馳せる。

「ふぅ」

ため息も出ようと言うものだ。あんな罠、いくらこの誠くんでも回避は不可能だ。

自殺ネットはテロで、弱者に許されたメディアだと、そう、関口は言った。

あいつの言った意味を何となくなら把握できるが、それにすがる詳らかな心情は理解できないし、わかった所で多分共感もできない。

それは、偏に強者に踏みにじられた弱者であると感じたことが、俺の経験に無いからだろう。

こういう言い方をすると関口のような奴は、持つ者と持たざる者という二元論を持ち出し、持論の殻にこもり外を見ようとしない気がする。だから俺はあの手の手合いが嫌いだ。

俺は自分の顔が他者から認められるようなことを知っている。運動はあんまり得意ではないが、頭はそれなりに回るものを持っているし、友達や恋人などには恵まれている。でもそれ以上に努力をしている。

努力で解決できないことの理不尽さを嘆く人間は本当に努力をし

ていない人間だと思う。

努力で解決できない領域がある、絶対に越えられない壁があることを、俺はまだ経験したことがないから、努力が万能であるとは云いきれない。しかし、死に物狂いでその壁を越えようとした人は例えその壁が超えられずとも、その死に物狂いさで代えがたい何かを得られると思う。その何かは世間に不満を垂らすだけでない存在から人間を救ってくれるに足りる物に違いない。

だから愚痴ややっかみ程度ならまだしも、心の底の不平不満を周囲に撒き散らす人間は嫌悪感を覚えてしまう。そんなものは誰しもにあって当然だ。努力を窺えない人間なら尚更だ。

お前は他者と関わるための努力をしたのか。モテるために情報のアンテナを立て、気を配り、シャワーを浴び髪をセットするために三十分早起きをし、身に纏うものの為の悩みを常に頭の中に置いているか。

いい点を取るために、自分に合った勉強法を身につけるべく工夫は凝らしたのか。教師達の心証をよくするための社交辞令と笑顔を欠かさないように配慮してるのか。退屈をおくびに出さず笑って笑って、ほめてほめて。

そんなことをせずにイヤホンを耳に活字に文字を落として、お前等は笑うんだろう。そんな風に他人に媚びを売って、と。

でもそんなお前等が、憎しみと己が呪詛にまみれて死んでいく。俺とお前、どっちが間違ってるんだよ、関口。それでもお前は、俺を、持つ者だから、と断じて、世界を二分するのか。

俺が関口にぶつけた言葉。後半ははっきり言って本心だった。人身売買は嘘だが、自殺ネットを利用して金儲けしようとしてたのは事実だし、それを、もちろん気持ちのいい事とは思っていないが、さして構わないと考えていたのは偽りのない気持ちだ。

自殺を望む人間は、死にたいなら死ねばいい。俺はそう思ってる。そいつが生きてるうちに何度も眠れぬ夜を過ごし、悩み抜いたとして、そうやって導き出した結論が生からの逃避ならそれはもう仕方のないことだろう。

いじめや空虚感だって努力を重ねて現状を改善できる余地はある、と俺は思っているが、そうは思えない人たちも居るのだろう。

ベクトルがマイナスの奴にどんな綺麗ごとも励ましも夢も希望も効果なんてあるはずがないのだ。

だから俺は死を選ぶことを否定はしない。その結論だって選択の一つだ。だけど、俺はそれを尊い行為だなんて絶対に認めはしない。

どこまで行っても自殺は逃避以外のなにものでもなく、それは「参りました」の一言と同意で、そうでしかあり得ない。そうじゃなきゃいけない。そうじゃなければ懸命に生きてる全ての人たちを斜にあざ笑う行為になるからだ。

望みが見いだせないと言い、人は死ぬ。しかし死を選ばなきゃいけないくらいの望みは間違っているんじゃないのか。

人には特徴がある。頭がいい奴。背が高い奴。声が低い奴。話が面白く無い奴。足が遅い奴。歌が上手い奴。明るい奴、暗い奴。

特徴が在るということは出来る出来ないがあって、努力の仕方があって、持つべき望みの相応不相応が在るということで、それを摺り合わせることが生きるということ同義じゃないだろうか。

人はスーパーマンでは生まれてこない。すべてを手に入れる巨万の富を持って生まれてくるのは、はたして六十億分の幾つだ。誰にでも愛される見目麗しさだってかなりのレアものだ。誰しもが主人公だが、誰しもが主人公としては扱ってもらえないのだ。

そうこう考えているうちに、気づけば保健室の前だった。頭を切り替え、ついでに表情も切り替える。

「すいません、頭が痛くて。薬でも頂ければ、と」

静かにスライド式のドアを開けながら、俺は保健室の中へと声を掛けた。

机に向かっていた、養護の教諭が俺の声に反応しこちらを向く。

「あら、頭が痛いのね」

「ええ。いつもは薬持ち歩いてるんですけど、切れちゃって。で、保健室なら、と」

教諭は、俺の言葉に首をかしげながら、申し訳なさそうな表情を浮かべる。

「ごめんなさいね。辛いのを我慢してるあなたには申し訳ないんだけど、保健室でお薬は渡せないのよ」

知ってる。

「そうなんですか！？」

「ええ。本当にごめんなさい。あなた五限は？　どうしても出なきゃ駄目なような授業？　お薬は出せないけどベッドなら貸してあげられるわよ？」

それも知ってる。

俺は眉根を寄せて一言、お願いしますと応えた。

数分後、保健室利用台帳にクラスと名前を記入した俺はベットに案内され、今は仰向けで保健室の天井を睨んでいる。未だに関口との会話が跡を引きずっている。アイツの昏い感情が未だに俺の心の波紋を立たせたままだ。

胸ポケットで携帯が震えた。携帯のサブモニターに新着メールの表示。

衝立に掛けられたカーテンで仕切られた個室の様なベッド。そっとカーテンの隙間から外を窺い、携帯を開く。

そこには見知らぬアドレス、すなわち関口からのメールが。

「約束は守る。合言葉は『カスパーゼ』だ」

このメールをあいつはどんな気分で打ったのか。すぐさま新規メール作成画面を呼び出し、聖への報告のメールを打ちながらも、俺の気分は一向に晴れることはなかった。

色とりどり、交差し絡まるイト - 福沢聖・倉瀬幸弘・湯島誠 -

五時間目の日本史。私は黙々と黒板を写していた。

三十代後半。口の悪い生徒達からは「行き遅れ」と陰口を叩かれるこの野村先生はひたすら板書をするタイプの先生だ。生徒を指名し質問を投げかけることも、逆に質問を受け付けることもしない。

だから、不人気な評判が先行しがちだ。だけど、板書中赤のチョークで書かれたこと以外がテストに出たことは今までない事を、まじめにノートを取っている人だけは知っているから、実は支持する娘も少なくない。

この日本史のためにわざわざ用意したゲルインクのオレンジ色のペンで重要な部分を書き留めていく。

ふと、スカートのポケットで携帯が震えた。

野村先生は黙々と板書をするため、教室内はカツカツと黒板にチョークが削られる音だけが響いている。

そんな中携帯が振動する音と言うのは案外大きな音となってみんなの耳に留まる。

誰からのメールか、モニターを見なくてもすぐわかる。誠くんだ。

誠くん用の着信メロディーに連動して、誠くん用のリズムを刻みながらその身を震わせる携帯は、この静かな空間では少し目立ちすぎる。あわてて携帯のサイドボタンを押して、バイブを黙らせた。

先生は。

左手をポケットに入れたままの姿勢で数秒。先生の様子を伺うが、相変わらずカツカツという音だけが響く教室の様子に変わりはなく、先生も板書を止める様子は見せなかった。

私は小さく安堵する。

「聖」

小さな囁きが聞こえた。声が聞こえた方向に目をやれば隣の席の由樹ちゃんが、にこりと笑顔をこちらに向けてくれていた。

私はその笑顔に笑顔を返すと、もう一度、先生の様子を窺ってから、携帯をそっと開く。

本開きにすると、カチリとまた静かではない音を立ててしまうので、気を使って半開きにした隙間から誠くんのメールを読む。

そこには「合言葉ゲットしたぞ！！　「カスパーゼ」だってさ！！　へへへ、凄くね、俺？　褒めてもいいよ！」とあり、最後に笑顔の顔文字が添えられていた。

合言葉。本当に見つかった。

誠くんからのメールに私は衝撃を受けた。震える手が携帯を取り落としそうになり、慌ててしっかりと掴み直す。

この合言葉が本当なら。

心臓が高鳴るのを感じると同時に目頭に熱い物がこみあげてくるのがわかった。

いけない。今は授業中だ。洟をすすり上げ、涙をこらえる。

開くときと同様、音を立てないように注意深く携帯を閉じ、ポケットにしまう。

「聖、どうかした？」

私のおかしな様子に気づいたのだろう。丸っこい可愛い字でそう書かれたノートの切れ端を私に投げてよこしたのは由樹ちゃんだ。

慌てて由樹ちゃんを見るが、由樹ちゃんは何事もなかったように、前を見つめせわしなくシャーペンを走らせている。

私は、もう一度静かに洟をすすり上げて、ノートの切れ端に返事を書いて由樹ちゃんに投げ返す。

「何でもないよ。ありがとう」

それから、私は前を向いてノートを取る作業に戻る。横顔に由樹ちゃんの視線を感じたが、黒板から視線を動かさなかった。

ノートに付けてしまった涙の染みは三滴分で済んだ。

※※※

「あぁ、いいよ。俺このまま帰るから。ゴミ捨ててておくよ」

「え？　いいの？　ありがとうね、倉瀬くん。　それじゃ、また明日」

そう言うと、中山さんはカバンを引っ掴んで教室を足早に後にした。部活の練習に急ぐらしい。

当番だった化学準備室の掃除を終えた俺は、燃えるゴミがそこそこ詰まった三十リットルのゴミ袋を持ち上げ、帰ることにした。

ゴミを持ったまま、靴を履き替え、正門のアーチをくぐらず右に折れる。こんな坂の上に建てられた学校にも関わらず、自転車を漕いで来る物好きな奴のための自転車置き場を抜け、校舎の裏へ。すぐに見えてきたゴミ集積場にゴミを放る。

さて帰ろうかと、きびすを返すと、ふとゴミ集積場の柵に止まるカラスが目についた。俺は数秒間、カラスと目を合わせる。

「カァーー」

興味を失ったようにそっぽを向いたカラスに一声かけて、こんどこそ本当に帰るべく正門へと戻った。

朝あんなにも気も足も重くさせてくれる坂道も、帰路の時だけは多少ありがたく感じる。一日の半分にも及ぶ拘束時間から解放された気の軽さと相まって坂を下る道のりは足取りも軽い。

帰宅部のメンツを中心にした人の波。そこに時折交じるジャージ

姿でグラウンドへ駆けていく運動部の連中が、間を縫って行く。いつもの下校時間の風景。チャカチャカ、と耳障りな音をあげて俺の脇を抜けたのはサッカー部か。

「トレーニングシューズ痛むだろうに」

誰だか知りもしない相手への、どうでもいい心配が一瞬脳裏をよぎるが、すぐに忘れる。どうでもいいことを感じて、すぐに忘れたという事実もすべてひっくるめて。

鞄から音楽プレーヤーを取り出し音楽を聞きながら坂を下る。駅を臨む段になり、勾配が緩くなったところで、携帯を開き、メール機能を立ち上げた。

幾度かボタンを操作し、メール画面がモニター表示された。

そこに踊る文字を俺は注意深く再確認していく。希望日時は今夜の十時。その案内が続き、並ぶのは料金の話。合言葉である「カスパーゼ」の文字列に小さな興奮を覚えた。

自然と口端が吊り上がりそうになるのを堪える。メールの中身を頭に刻み込み、消去する。

駅への道を歩きながら、胸の奥で静かに、冷たく沸き上がる情動を感じていた。

決行は今夜。

夜が待ちきれなかった。

※※※

聖にメールを送った後、保健室のベッドのサラサラとしたシーツの気持よさに俺はすっかり眠りに落ちてしまっていた。

目を覚ましたのは、五限の終了を告げる鐘の音でだ。

変に睡眠を取ってしまったために、重くなった頭を振り払って六限に出たが、耳に飛び込んでくる数式が、良い子守歌になってしまった。

ひとしきり寝汗をかき、大げさに船を漕いだ反動で起きた。その様子を後ろの席の三宅がひそめ笑いであげつらい、俺は反撃に消しゴムのカスを三宅の机の上に振らせてやる。そうこうしてる間に六限も終わり、一日が終わった。

二度も仮眠を取った俺の頭はさすがにすっきりしていた。寝汗をかき、多少肌がべた付いていたのが気になっていたのだが、俺の心に澱となって沈殿していた関口の呪文はすっかり消え去っていた。

ホームルームを三宅からの反撃を交わして過ごし、一日の義務を終える。

「三宅、湯島、今日この後は？　軽音の金やんの所でも行ってカラオケしない？」

じゃれ合う俺と三宅に声をかけてきたのは伏見だ。

それを受けた三宅は頭を掻きながら答える。

「悪かないけど、俺その前に運動部棟行きたい」

運動部棟。その名の通り、運動部の部室が立ち並ぶ校舎だ。各クラスの教室がある新校舎からはずいぶん距離があり、第一第二第三のグラウンドの並びと体育館の中間に位置している。正門前の坂を半ばまで下り、そこからわき道に入り、少しばかり登ったところの広い台地に、それらの運動施設は乱立してる。

「なんで、そんなとこいくんだよ？」

俺は疑問を素直に口に出す。

「て・め・え・が！！　俺の頭に消しカス降らせたからだろうが！！　取れねぇんだよ、これ！！」

「三宅、天パだからね」

伏見はさらりと酷いことを言う。

「天パ関係ないし！！」

「あるよ、よくからまるじゃん」

「んなことないし！」

「なくないよ」

三宅と伏見の漫才を見ながら俺はぼーっと考えていた。

軽音のとこに遊びに行くのも良い。三宅につきあってシャワーを浴びるのも良いかもしれない。寝汗を流したいとも思う。

でも、俺は。俺はなんだか。

「悪い、俺は先帰るわ。待たしてるんでな」

待たしているのは嘘だ。約束はしていない。でも俺は聖に会いたかった。

伏見に食ってかかっていた、三宅が俺の言葉に矛先を変える。

「おいぃぃ！　それはどういう意味だね湯島君！　君は僕らとの友情を蔑ろにして聖ちゃんを取るのか」

胸ぐらを掴もうと突進してくる三宅の頭を押さえる。リーチの差で俺が負けることはない。

「悔しかったら、おまえも彼女作れば、いいじゃん」

「湯島も酷なことを言うね」

伏見はまた酷い。

「そして、それはどう意味だね伏見貴久くん！！　友情を篤く重んじるこの三宅夕成に、そんなことを、という意味なら僕は君を許そう。しかし、もし、万が一にこの三宅ゆ」

「そんじゃな、伏見」

「うん、また明日」

「Ｈｅｙ！　Ｇｕｙｓ！！」

三宅が突っ込みを求めてわめき散らす。六回も授業を受けた後だというのに、なんとも元気な奴だ。たぶん授業を理解するという方向に一ミクロンもエネルギーを割いてないに違いない。

「三宅」

「なんだい！　湯島君！！」

喜色満面の表情を向けてきた三宅に俺は言い放つ。アイアンクローをがっしりと決めながらだ。

「聖ちゃんと呼ぶなといったろう？　な！？」

「はい」

「わかればいい。じゃな、三宅」

「まったく。明日はバスケつき合えよ！　三宅くん寂しくて死んじゃうぞ！」

三宅の軽口を背中で受け、俺は教室を後にする。

教室を出て一旦ロッカーに寄る。ノートをバインディングしてあるファイルを取り出し、鞄に詰める。

鞄のチャックを締め、ロッカーを閉じようとしたところでそれが目に入った。

「あ。……。やっぱ。俺としたことが痛恨のミス」

そこには一限の前に幸弘から借りてそのままの辞書が置いてあった。

たしかそういえば二限で使うから返してくれと、そう言ってたような気がする。

辞書を片手に途方にくれる。今からではタイムマシンでも使わない限り、二限に間に合わない。

言い訳が高速で頭の中を飛び交い、形に成らずに消えていく。本当に必要なら俺が返しに来なくたって、自分で取りに来ればいいと逆ギレしかけるも、それも駄目だ。教室から出てふらふらと合言葉を求めて彷徨っていたのは俺の方で、もしかしたら幸弘はしびれを切らし俺のクラスに来てたかもしれない。

完全な失態に呆然としてると、窓の外、校舎の脇を抜ける、正門坂を下っていく人影を捉える。幸弘だ。

この偶然を逃す手はない。謝ろう。そう直感した。言い訳をするでもなく、おちゃらけるでもなく。こればっかりは百パーセント俺の非だ。

「おぉーい！！　幸弘！！　辞書！！　悪かった！！！」

俺は声張り上げ、辞書を握った手を窓から振る。

しかし、幸弘はこちらを向かない。怒って無視されてるのかもしれない。元々愛想のいい奴ではないのに、さらに怒らせて態度を硬化させてしまったか。

「おぉーい！！　幸弘！！」

何度か声を上げて、俺は諦めた。無視されてるのではないことに気づいたからだ。

幸弘の耳にはイヤホン。視線は手に持った携帯に注がれている。これでは、俺がいくら呼びかけようと、無駄だ。

仕方がない、明日、朝一番で謝ろう。帰っていく幸弘の姿を見送りながら、そう思い直す。

幸弘は手にした携帯を覗き込みニヤニヤと笑みを浮かべている。なぜか一瞬その笑顔が酷く昏く歪んだものに見えた。辞書を返し忘れた罪悪感も忘れるくらいに。

月明かりの舞台で - ～～～と～～～～の会話１ -

天気予報は外れた。

雨は降っていない。薄雲をまとった月の光が夜の闇をおぼろげにはぎ取っている、夜。

夜陰と月光の狭間でぼんやりとそこにそびえる夜の学校は、見慣れた物のはずなのに、どこか違う世界の建物のような印象を受けた。どこか幻想的で。どこか蠱惑的で。どこか儚げだ。

守衛詰め所がある正門を避け、脇を抜ける。裏門近くの柵を越えて敷地に入り、身を屈めるように小走りで校舎の脇までやってきた。

確認のため、携帯を開く。

指定された箇所の窓に手をかけると、なんの手応えもなく、ガラス窓がすんなり開いた。

胸の高さほどに開いた夜の校舎への入り口に飛び上がり、身を滑り込ませ、教室へと降り立つ。

一階。校門から見て右から二番目。一年生の教室なことは分かるがクラスまでは定かではない。

窓から刺す青白い月光に机と椅子がその影を浮かび上がらせていた。そして、眼に入るのは教室の前方中頃後方と三つ並んだ廊下へのドア。

当然鍵がかかっているはずの三つのドアの内、メールで指定された真ん中のドアに手をかける。先ほどの窓と同様、すんなりと開いた。

私はその段になってやっと、あの合言葉に呼応して、返信されてきたメールの存在の恐ろしさに気づいた。

完璧な自殺を段取る、という噂に疑いを挟む余地はもうなかった。

引き続きメールをみながら、警備装置を避けて、人の息づかいのしないコンクリートの構造物を進む。その静けさはまるで、打ち捨てられた廃墟か、弔う者の訪れない霊廟を思わせた。

屋上への階段を上り、最後のドアへ手をかける。ここが開いていなければ、私は自殺を諦めるだろうか。ふとそんな考えがよぎる。

ノブを握る手のひらが汗ばんでいた。緊張しているのだろうか。

当然だ。私はこれから死ぬのだ。死ぬ前に平静なんか保てるはずもない。

非情な運命を飲み込み、恐れも、誇りも、他人への感謝も、生への執着も、愛する人への想いも、ほかにも一杯。そう一杯だ。いっそ喉笛がちぎれるくらいに叫び倒して、狂ってしまいたいくらいの感情の津波を、すべて飲み込んで平然の境地になど立てるはずもない。

いくら泣いても枯れてくれない涙がまた溢れた。

泣くのは嫌いだ。自分が悲しんでるのだと気づいてしまうから。

それに気づいた途端、そこは穴になる。心にポカンと開けてしまった穴を、悲しみは見逃してくれない。

悲しみはそこにどんどん押し寄せてきて、心の中はすぐに涙の基で一杯になる。泣けば泣くほど、止められない涙が私の頬を濡らせば濡らすほど、悲しみは大きくなる。

そうなったら、私はもうどうすることもできない。体が泣きつかれるまで、もう誰のものだかも分からない、大きくて暗くて重くて冷たいモノが、心の中で跳ね回るのをじっと我慢しなきゃいけない。

だから泣くのは嫌いだ。それでも私には泣くことしかできなかった。

泣くのが嫌で、悲しみがガンガンと魂を削るのをただ我慢してるのが嫌で、私は思いきって重い鋼鉄の扉に力を込める。

ガコン、と重厚な金属音とともに、その扉はいとも簡単に開いてしまった。

空調の切れた夏の夜の校舎のすこしむっとした暑さを、押し退けて入ってくる涼しげな夜気が、私を屋上へと迎えた。

私が学校まで来たときは、まだ薄雲を纏っていた下弦の月が、今やその姿をすべてさらし、その明るさで屋上を照らしていた。

私はその明るさと涼しさに吸い寄せられるように、屋上へ、一歩二歩と足を踏みだした。

頬を落ちる涙を、夏の夜の風がどこかへ連れ去っていく。

「随分と早いな」

私が屋上の中心辺りにまで歩を進めたところで、突序を背後から声が襲う。

「きゃぁあっ！」

想像だにしなかった何者かの存在に私は金切り声を上げ、その場にへたりこんでしまう。

「約束の時間は十時とメールにはあっただろう」

「は、はいっ！」

真夜中の無人の校舎で得体の知れない誰かとの遭遇。私の頭は先ほどまでの涙もどこへやら。一瞬にして全身を恐怖が支配していた。

パニックなった頭はなにも機能せず、只ひたすら自分のこれからを案じるばかり。

しかし、どれだけ経っても、言葉も暴力も、何一つ私に向かってこなかった。

少しだけ、冷静になって、問われた言葉の意味を思い出し考える。

この場にいること、約束のことを知ってること。よくよく考えれば、考えるまでもない答えが一つある。

「あの、自殺ネットの人ですか」

私は恐る恐る声の主に向き直った。

そこを何と言っていいのか。私が出てきた階段の踊り場部分と扉を覆う建物の上。屋上に突き出た立方体の構造物の上に、その男の人は座っていた。

目元が少し隠れるくらいの長さの髪で隠された表情は、月明かりを背にした陰になっていて窺うことはできない。イヤホンを手遊びのようにくるくると回しながら、その人は私を見下ろしていた。

「そうだ」

再び、その人が口を開いた。口数の少ないその言葉はなんだか威圧感を漂わせていて、私の恐怖は薄らぎこそしたものの、根本的には拭えなかった。

「あの、ごめんなさい。遅れちゃだめだと思って、早く来ちゃったんですけど。あのご迷惑だったらもうちょ」

「あー、別に良いよ。時間なんてそこまで重要じゃないし。何時間も早かったり遅かったりしたら困るけど、っと」

男が屋上の床に降り立った。

「じゃあ、早速始めようか。自殺」

まるでコンビニに立ち寄るような気軽さで、さらりと、男は衝撃的なことを口にする。

「え、あの、えっと」

「ん？　どうかした？」

「いえ、あの」

「あれ、もしかして、君？　違う人かな？　名前は？」

「私は、」

ここで名乗ったら、私はもう後には引けない。そんな直感が浮かぶ。生と死の狭間に今まさに立っているのだ。裏を返せば私はまだ、生の側に逃げ込めるかもしれない。

逃げ腰なことばかりを考える私の背中を、夜風が押した。喉のすぐそこでつかえていた言葉が声となって漏れる。

「私は、福沢聖です」

それ以降言葉に詰まり俯くしかない私。

そんな私を無言のまま見つめていた男は、やがて口を開いた。

「そうか、福沢聖さんか、間違いないね」

男は頷着ながら続けた。

「それと、いいんじゃない直ぐじゃなくても。死ぬの。今直ぐ死ななきゃって訳でもないし。心の準備って奴がさ、必要だろうしね。好きにするといいよ、死ぬのは俺じゃない。死ぬのは君なんだから」

そう言われて指を差された。

「準備できたら、声かけて」

そう言い残すと、また階段上のスペースに登るべく梯子に男は梯子に手をかける。

「あ、そうそう。やっぱやめますってのだけは無しね。それやられると自殺ネットの仕組みが壊れちゃうから。まぁその場合は俺が突き落とすだけなんだけどさ」

またも衝撃的なことを口にする。こんな狂気の沙汰のような仕組みに関わる人にまともな人間性を求めてもしょうがないのかもしれないが、心の底からこの人のネジの飛び方に恐怖を覚える。

「それじゃ、ごゆっくり」

そういって手をひらひらと振ると、ポケットから音楽プレーヤーを、取り出しイヤホンをセットする。

手元でリモコンを弄る男に、私は声を絞り出した。

「あ、あの！！」

きょとんとした顔でイヤホンを外す男。

「ん？」

「あ、あの。話。……私の話！　聞いて貰えますか」

何故、こんなことを口にしたのか。

得体の知れない男と、とにもかくにも言葉を重ねて恐怖を払拭したいのかもしれない。死を前にした不安と緊張で沈黙に耐えられなかったのかもしれない。

それも間違いじゃない、と思う。

でも、たぶん。いやきっと。

私は誰でもいいから知ってほしかったんだと思う。本当に知ってほしい誠くんには、しかし、絶対に知ってほしくない真実を。

そのどす黒い固まりを独りで抱えてられるほど私は大人でも強くもない。私は悪くないんだ、ということを誰かに分かっていてほしかったのだ。

それがたとえ、人に死を運ぶ不吉な男でも。

男はしばし黙り、プレーヤーを操作している。

「駄目ですか？」

私がそう声をかけると、男はくるくるとイヤホンを巻き取り始め、私の顔を見据えて言った。

「いいよ。話してごらん」

男は立て膝に肘を乗っけると、私に話を促した。

私は意を決し口を開く。おぞましくぬぐい去りたい記憶を、語るために。

別れの場の慟哭 - 湯島誠の葬儀への参列 -

雨。

雨が降り続いている。

今年の梅雨は空梅雨だ、と、六月に入る前から様々なメディアで叫ばれていたが、それはあたった。今年の梅雨はほとんど雨が降らなかった。しかし、直に梅雨明けだと、言われた今、梅雨は最後のあがきを見せていた。

四日前の夜半から、天の底を抜いたような豪雨が列島各地を襲った。日本中で浸水や氾濫の報が相次いで起こって尚、雨は止む気配を見せず、一刻の晴れ間を見せることなく今日で四日目。

そして。そして、聖が死んでから四日目だ。

三日前の朝、聖が通う。……聖が通っていた、女子高で、屋上からの投身自殺体が見つかった。学校関係者も警察関係者も、直ぐに「高校生連続投身自殺事件」であると、確信し、情報管制を敷きながら、一切の手配を公にすることなく迅速に処理を勧めた。

一般に自殺というのは、その自殺者本人の自殺への意志が確かたる場合でも「変死」という扱いをされる場合が多いらしい。加えて、聖の死は「事件」の一端として扱わた。遺体は警察病院に収容され、司法解剖を受けさせられたため、聖は発見されたその日、家に帰れなかったとのことだ。

すべてあとから耳にした話だが。

警察に引き取られて一夜が明けた。死体発見から翌日。聖は家族に迎えられ、物言わぬ亡骸として家に帰った。両親の寝ずの番に見守られ通夜を明かすと、友引であった三日目をまたぎ、四日目、葬儀が執り行なわれることとなった。

俺はといえば三日間、メールも電話にもでない聖に、何か怒らせることをしてしまったかと気を揉んでいた。例えばクラスの面子、女子も多く居るメンバーで遊びに行ったのがバレてしまったのかと、様々な不安を募らせた。こうして俺は聖が死んだことを知らず、くだらない言い訳ばかりを頭の中でグルグルと巡らせていた。

遺品の整理をしていて、聖の携帯に残った履歴から俺の存在を知ったのだと言っていた聖のお母さんから電話が入った。昨日の晩の事だ。

そこで俺は初めて聖の死を知った。

俺に事情を話すうちに嗚咽が混じり、最後の方はまともに話せなかった様子のお母さんから、電話越しに詳しいことを聞くのは難しかった。

聖が死んだ。詳しいことはあまり聖が話してくれなかったけど、聖と特別仲良くしてくれてありがとう。明日、葬儀を執り行うから良かったら参列を。そんなようなことを支離滅裂、涙ながらに伝えられた。

俺は、聖のお母さんが何を言ってるのか、全くわからなかった。あえてか、冷静になれずに伝え忘れたのかはわからなかいが、なんで聖が死ぬことになったのかを終ぞ話してくれなかった所為もある

かもしれない。しかし、そもそも恋人の突然の訃報をすんなり、しかも電話連絡でされて、受け入れられる人間など居るのだろうか。

俺は受け入れることもできないのに、ただ事実はそこにあって、時は流れていく。

聖が死んだ。俺の恋人は二度と帰らぬ人となった。

俺は泣くことも叫ぶこともできないまま、聖に機嫌を伺うための、繋がらなかった発信履歴を、一晩中眺めて過ごした。

※※※※

聖の死から四日目。何も判らないまま、それ以前に聖の死を受け入れもしないまま、俺は茫然自失の体で聖の葬儀に来ていた。親父から一式を渡された喪服に身を包み、ポケットに数珠を入れ、入っている金額もわからない香典袋を誰に渡していいものか悩んで立ち尽くす。

その段になって、聖の両親の顔も知らなければ、おそらく参列しているだろう親類、担任や学校関係者など、誰の存在も俺は知らないのだと思い知らされた。

聖の一番親しい人間が俺であり、俺の一番親しい人間が聖だ、という確固たる関係性がここに立っていると滑稽に感じられ、言い知れない不安が募る。

昨晩の電話から欠如したままの現実感は、そんな不安を抱いた心

さえも、俯瞰で俺に見せてくる。

なんで俺はここに居るのだろう。そんな疑問がひいては押し寄せる。知らない黒い人達の波の中で、ふと、足元を見れば、そこは両の足を支える地面すら無い漆黒。

慌てて、顔を上げれば、喪服に身を包んだ誰かが、しめやかに悲しい顔をしている。誰も俺を見ない。

俺を見てくれるのは誰だろう。それは。

「ご記帳はなさいましたか？」

昏い酩酊から、声が、俺を救った。

声の主を振り向けば、胸元に真珠を光らせた女性が、受付の机に座ってこちらを見ている。

「あ、はい、あの。えっと、俺湯島誠って言います」

「えっと、あのご記帳をお願いしてもよろしいですか」

そうまで言われてから、自分が滑稽な自己紹介をしていることに気づいた。受付の人が俺を知っているハズもないのに名乗ってどうする。

困惑の表情を浮かべる女性に、軽く会釈をし不手際を詫びると、俺は記帳を済ませる。

「あの、これ」

葬儀の作法も判らないながら、内ポケットから香典を覗かせると、女性が助け舟を手向けてくれる。

「あ、香典お預かりいたします。湯島様ですね」

「はい、お願いします」

そうしておっかなびっくり香典を渡して、記帳をすませると、俺は葬儀の末席に居場所を見つけた。

数珠をまるでお守りかのごとく握り締め、しめやかな場で自分の存在が揺らぐような感覚を覚える。不安な心が叫び、助けを呼んだ時浮かんだ顔は聖のものだった。

突如、重く質量を持った哀しみが急激に押し寄せた。葬儀のしめやかな空気が、哀しみを増幅し、拠り所のない俺の身を浚おうとする。

ふらふらと揺れる俺を、またもや、耳に飛び込んだ誰かの声が揺さぶる。

「ねぇ、あなた、聞いた？」

「なにが？」

「聖ちゃん自殺みたいよ？」

「お前っ！　そういう事、こういう場で口にするんじゃない！」

「何よ、皆知ってることよ？」

「ホントか？」

「ええ、ホラ、あなた知ってるでしょ？　例の高校生の自殺の事件」

「ああ。今話題の奴だろう？　……まさか、それだって言うのか！？」

「って話しよ。そのへんはホントかどうか分からないけど。ほら、一日通夜が遅れて、友引もあって葬儀も遅れたじゃない？　そういうゴタゴタがあったらしいわよ」

現実感の欠如はいよいよ留まることを知らない。

聖の死すら受け止められていないのに、今度は何だ。聖が自殺。

一切の理解の助けもないままに、真実は俺を置き去りにする。聖に近しい存在としての俺の自負など、一瞬も省みることなく。

聖が自殺など在るわけがない。そんな葛藤を抱くうちに時間は、真実同様俺の意識を置き去りにする。

気づけば、読経が進み、周囲の人間は前席に座るものから順に焼香へと祭壇を登っていた。

順に並び、焼香へ赴く。

数珠を左手に握り、前の人の見様見真似で香を手に取る。掲げるようにして黙祷を捧げ、香炉の中の焼けた石へ振りかける。

香が焼ける匂いが鼻先に充満。俺は顔を上げ聖の遺影を見る。

四つ切に寸断された写真の聖は笑っていた。

涙がこぼれる。

頭の悪い俺は、やっと。やっと聖が死んだことを理解する。

もう二度と笑ってはくれない。もう二度と話せない。もう二度と口づけを交わすことはできない。もう二度と。

もう二度と聖と会えない。

そんな簡単なことが。一晩掛けて判らなかった。聖の死を三日間も知らなかった。

聖が自殺に踏み切った心中など、露とも知らなかった。

膝が折れる。香炉を置いた台にもたれ掛かる。衝撃で、香炉が倒れ、焼けた石と抹香が散乱する。

泣いた。大声を出し涙を流した。

まるで赤ん坊のように。無力でただ泣くことしか知らない赤ん坊のように涙を流す。

実際、俺には何もできなかった。ただ泣くことしか。

眼の奥が熱くなり、鳴き声は反響して脳を揺らす。感情の波がさ

らなる波濤を呼んで、体中の水分が涙となって、目から零れた。

他人の体のように力のこもらない全身を持ち上げる。すがるようにして香炉置きの台に寄りかかり身を起こした。

周囲のどよめきも困惑も無視し、ふらふらと棺へ向かう。

参列者から離れた席に座り、目を真っ赤に腫らした女性が何事か声を上げて俺に近づいてくるが、俺は気にせず歩みを続ける。

焼香の人間が上がるよりさらに一段上。斎場の、一際暖く明るい黄白色のスポットライトが降り注ぐ場所。そこに聖の眠る棺の窓はあった。

取っ手に手を掛け、観音開きになっているその小窓を開く。

俺は、慟哭の声をあげた。

そこには原型を留めぬほどに歪んだ顔に包帯が幾重にも巻かれた、聖が眠っていた。

少し遅れて駆け寄ってきた女性が俺を棺から引き剥がすと、慌てて小窓を閉める。

何事かを泣き叫ぶ女性の声は、しかし、俺の耳には届かなかった。

俺は涙を流し、ただただ涙を流し、そして、どうしようもない怒りに明け暮れていた。

正義と復讐の死者 - 関口孝明と湯島誠の接触 -

静かな図書館にキーボードをたたく音が響く。ノートパソコン特有の軽やかな打鍵音が、僕は好きだ。

阪嶺大学の図書館。無線ＬＡＮが飛んでいるラウンジでネットサーフィンをしながら僕は、さまざまな掲示板やチャットに顔を出し、情報を集めていた。

自殺ネットに関する情報収集や書き込みは、もっぱらこの大学の図書館で行っている。

御坂学園の生徒ならば、簡単な手続きで大学図書館の利用証は作れるし、無線ＬＡＮの使用のために必要なラウンジの使用許可証は、当日のみ利用可能な簡易ＩＤが図書館前のゴミ箱にいくらでも溢れてる。

パソコン上のデータさえしっかりと消せば、僕の書き込みは証拠はネットの海に藻屑となって消える。残るのは文字通りテキストのみで、そこから僕は辿れない。

そうやって保身を張り巡らせながら、僕は前向きに新たな合言葉を探していた。

一週間前、新たな自殺が行われた。被害者の名前は、福沢聖。公式には報道されていないその名前をネットで知り、僕は一晩かけて福沢聖に関する情報を探し出した。

警察がいくら報道規制をしようと市井の口に戸は立てられない。

噂とデマを何度もふるいにかけ、一角の真実にたどり着く。

有名女子高に通う福沢聖は絵画において非凡な才を有したていたらしく、ネットの検索では数多くヒットがでた。過去に大小様々なコンクールに出展した経歴を持つらしく、出身学校などの略歴はいとも簡単に知りえた。

福沢聖という人間が何を考えていたか、僕にはわからない。

しかし、二つ分かることがあった。それは福沢聖が有名なお嬢様学校に通い、他者に優れた才を持っていたこと。そしてそんな人間が死を選んだことの二つ。

これは僕を湯島誠の呪いから解き放つ、魔法だ。

「持つもの」ですら、世を儚み、死へと救いを求める。

こんな状態で、世界が間違っていなくて何が間違っているというのだろうか。

湯島は間違っていない、と言った。間違っているのは僕のほうだと。しかし、あいつは根本的に理解していないのだ、間違いというものを。いや、頭の切れるあいつの事だ。間違いに気づき、諦念の基にあんなスタンスを築いたのかもしれない。間違っていようがどうしようもない。配られたカードで勝負するしかないのだと。

しかし、ディーラーのイカサマに気付きながら負け続けるなんてご免だ。ディーラーの気まぐれで引いた十回に一回のスリーカードに一喜一憂。そこに生きがいを見出し自分の気持ちを偽るのが賢い処世術なんだなんて、それが大人なんだって、そんなこと言わせや

しない。

戦わねばならない。間違いは是正しなければならない。僕の信念は折れていない。

自殺ネットは世界への闘争の橋頭堡だ。自殺者の表で、社会へのテロリズムだ。

経済も政治も文化も、すべて人によってできている。世界の最小構成単位は人だ。自殺とはそのもっとも重要な、人、が欠落していくということだ。その社会を司るルールにノーを突きつけて。それはこの世界の瓦解の始まりだ。

戦争の勝者か、マネーゲームの勝者か。この世界を造って高みの見物を決め込む奴が居るはずだ。そんなやつらの思いの腹をあざ笑い再生の死を持って足元を救ってやる。

この世界を地獄と例えるなら、自殺ネットは唯一の光明。持たざる僕らに差し伸べられた蜘蛛の糸だ。カンダタはこれを独占し、己が身を案じて他人を蹴落とそうとした。その浅ましさに糸は切れてしまった。

だから、僕はそれをしない。救いにすぐに飛びついたりはしない。僕は死をあえて選ばない。救いを求める人間、一人でも多くに光明が指すように奔走すべきなのだ。

その一念でキーボードを叩き、僕は合言葉を再び手に入れた。

あとはそれを誰に託すか。絶望と悲痛の叫びで死を選ぼうとする人間を捜しださなければいらない。そのために今、こうして自殺ネ

ットにアクセスしているのだ。

机に広げたノートパソコンの脇に放っておいた携帯電話が鳴動する。あらかじめセットしておいたアラームだ。

時間だ。

パソコンを畳みキャリーバッグにしまうとラウンジを後にする。昼休みはまとまった時間が取れないのがネックだった。

図書館を出ようと二枚ある自動ドアの一枚目、内ドアをくぐった時点で、ムワッとした熱気が身を包む。

先週の半ばから五日間降り続いた雨を最後に梅雨は明けた。曇天が晴れた後に待っていたのは夏。それも猛暑だった。高く抜けた晴天に入道雲。その雲の隙間を塗って降り注ぐ陽光はアスファルトを焦がし、熱気で人々を襲う。

私服姿の大学生とすり違いながら、さらなる暑さに身構えて二枚目のドアをくぐった。

「あっつ」

襲いかかる熱気とそして光。思わず目を細める。

蔵書のために調光が行き届いている図書館の館内に比べて、太陽の光は容赦がなかった。

遮るものがない日差しは視界を白やかせる。眩しさに白一色に染まり、狭まった僕の視界に飛び込んだ光景。

それは太陽を背負い、陽炎をまとった男の姿。

徐々に目が明るさに慣れ、光景の輪郭を取り戻す。段々とはっきりとしてきた視界は顔の細部を捉える。

そこに立っていたのは湯島誠だった。

無意識に顔を下げ、視線を避けてしまった。

すぐにその考えを振り払う。僕の正しさは揺るがない。湯島がなんと屁理屈をこねて僕をなじろうとも。浅はかな企みで金を無心しようとも。僕の考えは、自殺ネットが抱く意志の気高さは正しく世を裁く。

顔を上げた。しかし目線は合わせない。たじろがず堂々と、かつ一顧だにもしない。

湯島の脇をすり抜けながら、僕は、肩越しに一声。

「合言葉ならほかを当たってくれ」

そう言うやいなや、肩に衝撃。肩に鈍い痛みを感じたのも束の間、強い力で半身を引かれ、強引に後ろを振り向かさせられる。

振り向いた僕の眼前にあったのは湯島の顔ではなかった。それどころか正気な人間の表情ですらない。

むくんだ顔に浮かぶは染紅に血走った瞳。髪はボサボサと艶を失い、白いフケをこれでもかとたたえている。目元を隠すようにだら

りと垂れ下がった前髪。うっすらとしたひげを頬全体に生やして近くで見ても、コレがあの湯島なのか目を疑う。

まるで凶気に狂った前衛画家の自画像のような表情をたたえた男が、僕の肩を掴み、髪の隙間から窺う眼光で射すくめている。

「ひっっ！」

とっさに短い悲鳴が口から出るのを防げなかった。後天的な社会で身につけた信念の正しさや気概などでまとった鎧などいとも簡単に打ち砕く、それは、純粋で根源的な感情の塊だ。

湯島に何があったのかを知る由もない僕ですら、瞬時にそれを感じ取った。それは果ての無い憤怒と憎悪だ。

「関口、合言葉知ってるだろう」

湯島の言葉に怒気はなかった。その凄烈な表情佇まいとは相反して、言葉は冷静で淡々と。しかしソレがいっそう気味の悪さを醸し出している。

自分の顔が恐怖でいかに歪んでいるのかも判らずに、僕は、湯島の狂気の眼を覗き込む。いや、眼を離せないのだ。引き込まれれば引き込まれるほど恐怖を増す湯島の底なしの黒。その黒い穴に手がかりはなく、一度滑り込めば成す術も無く恐怖に取り込まれるだけ。

「なぁ。教えてくれよ。会わなきゃ行けない奴が居るんだ」

ぎりぎりと肩に食い込む湯島の手が激痛を生む。だが、それよりも心が悲鳴を上げていた。理性など、なんの役にも立たない無慈悲

な心の暴力の世界に、僕はすぐさま屈したのだ。

「あ、合言葉は“サイトカイン”だ！　教えた！　教えたぞ！　は、離してくれ！」

肩の激痛が消える。湯島は胡乱な眼を僕の視線から外すと、どこかへと去っていく。

「サイトカ……。ゆるさ…い。ひじ……か…き。ころ…。こ……してやる！！」

何事か呪詛のようにうわ言を言いながら、憤怒と憎悪の化け物が図書館前の広場に通じる階段を下りて行き、ようやく僕の視界から消えた。

膝から崩れるようにしてその場にへたり込む。涙を拭くことも忘れ、ただただ僕は縮み上がっていた。日常に、僕らの生きる世界に、僕らの生きた世界の人間だった存在に、あんなにも狂気の感情は宿るものなのか。

以前の時から何があったのか僕は知らない。判っているのは唯一つ、自殺ネットが絡んでいるという事だけだった。

ジリジリと焦けるアスファルトの上。蒼穹に浮かぶ入道雲の下。僕はノートパソコンを抱えて呆然とする事しかできなかった。

月光の舞台で - 湯島誠の復讐 -

聖の死から二週間が過ぎた。

その間俺は涙を涸らし、心を亡くした。

今俺を突き動かす物はなにか。なにも感じなくなったはずの擦り切れた心に、辛うじて揺らぐ小さな、しかし決して消えはしない強かに燃える思いを支えに、ここに立っている。

下弦の月は、厚い雲に覆われ地上を照らさない。月明かりによる光を遮られた夜は、暗く、重い。梅雨明けとともに訪れた夏の暑さは、日が暮れても尚収まる事を知らず、粘性の高い空気がどんよりと夏の夜に堆積している。

湿度の高さと相まって、寝苦しさを覚える熱帯夜。俺は夜の学校に立っていた。

校舎までのアプローチの坂道のふもとで携帯を開き、メールを確認する。

場所と、其処に至るまでの経路、時間。細かく記されたそれは、本来、見るものを死へと誘う呪いの言葉だ。聖をも襲ったであろうその文字列はしかし、今の俺のとっては希望を引き寄せる魔法の言葉に他ならない。

往来の無い並木道の坂を小走り駆け上がっていく。

月明かりもほとんど無く、あったとしても豊かに茂る街路樹の天

蓋に遮られた道は、とっぷりと宵闇に沈んでいる。唯一の灯りは街灯のみ。十数メートル間隔で灯る街灯が、暗闇の中に、ぼんやりと坂道だけを浮かび上がらせている。

街灯の仄かな橙色に照らされた坂道は、しかし、緩いカーブに沿って、先は少しずつ見えなくなっていき梢の間の暗さに消えていく。後ろも同様だった。今まで登ってきた道も、同じ様に、すこし行ったところで緩やかに婉曲し、見えなくなってしまう。

夜に切り取られた回廊。そこを駆けながら、俺は、心のうちで燻り爆発を待つ、憎悪の炎を確かに感じていた。

やがて坂は途切れ、主達の帰宅とともに静謐を帯びた校舎と校門が姿を現す。

人気のない学校を前に、憎悪の炎の熱に当てられながら、俺はぼんやりとその感情の萌芽に思いを寄せていた。

※※※

葬儀の日。聖という存在を失ったという出来事がもたらした感情の津波は、俺に他の一切の事を考える余裕を奪い去った。葬儀からどうやって家に帰り着いたのかすらわからない。

見るも無残な遺骸が横たえられた聖の棺にすがりつき、声とも取れぬ雄叫びを上げて泣き喚いて居た俺は、何人かのスタッフに取り押さえられ、控え室のようなところに連れて行かれた。

茫然自失の体でへたり込み、うわ言を垂れ流す俺は、いつの間にか連絡が取られ呼び出された母親に手に引き渡され、家へと送り返

された。道中の記憶は無い。何事か心配げに声をかけてきた母親には何がしかの返答をしたような気もする。

家に着き、それから三日三晩、俺は涙に明け暮れた。食事はしなかった。時折、思い出した様に部屋を出て、階段を下り、ペットボトルのお茶を飲み干すと、疲れて意識が飛ぶように眠りにつくまで、ひたすらに泣いた。

三日三晩そうして泣き腫らすと、体が限界を告げた。それが俺には悔しくてならなかった。体力は底を突き、腹は減り、ろくに水分を摂ってもいなかたからか、涙も止まった。聖の死を悼み、こうまで悲しみに明け暮れているのに、現実を生きる体は、食べ物を飲み物を、生への糧を貪欲に求めてきたのだ。

そんな悲痛の叫びを無視し、俺は自分を苛めるようにしてさらに奥へ。心にぽかんと口を開く悲しみと絶望の穴の奥へと降りていこうとした。それは哀悼でもあり、恋人の死の兆候に気づけなかった愚かな自分への罰でもあった。

部屋に引きこもり、外部との接触を絶って、只ひたすらに、黒くて重くてざわざわと心の奥底を這い回る感情の塊と向き合うだけの時間に明け暮れた。

それは時に針の様な尖った姿に変容し、ある時はゆっくりとその体を引き延ばし俺を包もうとして、またあるときはずしりと心の底を抜くかのように重く沈む球体に姿を変え、さらにはなんの形も持たないひたすらに果ての見えないのっぺりとした暗闇にもなった。

幾度も姿形を変えながら心に巣くうそれと見つめあうだけの時間。そんな辛く、悲しく、恐ろしくもあり、それでも逃げる事の出来な

い時の流れから俺を引っ張り出したのは、強引に鍵のかかった部屋の扉を開け、俺の腕を掴んで引き起こした父親の一言だった。

「お前の彼女は、お前のそんな姿を望んでいると思うのか」

その言葉は小さな波紋を俺の心に残した。

小さな波は心を叩く。聖は何を望んでいるのか。それを考えた時、俺はまたも、わが身可愛さに聖の本懐を蔑ろにするところだったことに気づいた。

涙に明け暮れ、飲まず食わずで、このまま聖への哀悼と謝罪の念を抱いたまま朽ちていければ。本当にそう思って、暗い部屋に座り込んでいた。

しかし、俺にはやるべき事があった。朽ちた体では為せぬ大仕事。

そこに気づいた時、俺の心に住まうのがあの忌まわしくも無視のできない感情の塊だけでないことに気づいた。

黒く広がった縦横無尽の空間。その端の端。今にも消え落ちそうな儚さで、そこに聖が居たのだ。

聖のか細い泣き声が、俺にはしっかりと聞こえる。

体育座りで、自分の足に顔を埋めすすり泣く聖に俺は問いかける。

「俺はどうすればいい？」

「……」

聖は何も答えない。

もう一度問いかけた。

「どうして欲しい？」

小さな叫びが聞こえた。

「あいつを、私を自殺する気にさせたあいつを」

言葉が途切れる。

「うん」

俺は先を促した。

「……殺して欲しい」

「わかった」

そう答えた瞬間、暗闇の中に小さな光が灯った。それは憎悪。怒り。復讐の誓い。

俺は心の中から出た。部屋を降りる。母親の用意したおにぎりを腹に詰め込み、喪服を脱いだ。

※※※

静寂を表す、シーンと言う音がうるさいような気がしてくるほど

の廊下。昼間の喧騒を思い返せば、そこは異空間という代物以外の何物でもない。

そこはまたも暗闇に浮かび上がった回廊だった。曲がり角ごとに光る緑色の非常誘導灯。その淡い光を頼りに屋上を目指す。

警報機設置の穴を示すメールの内容は、怖いくらいに正確だった。

一回の中央階段から二階に上り、校舎を横切り一度旧校舎へ。廊下を避け、美術室脇の物置を通ると、もう一度本校舎へ。

どうやれば、こんなルートを正確に導けるのか。一瞬のそんな疑問が浮かんだが、屋上へ続く階段を前にして瑣末な問は吹き飛んだ。

屋上へと続くドアに手をかけた。ドアノブを回し、ゆっくりと力を込めドアを押す。鍵が掛かっていれば感じるはずの抵抗は、無い。

暗さに慣れた目に明かりが舞い込む。どんよりと浮かぶ夜の雲が割れていた。

月光が屋上を柔らかに照らす。その月光の舞台へと足を踏み出す。

聖の仇を晴らすために。心のなかで未だに泣いている聖に報いるために。

殺す者と殺される者 - 湯島誠と倉瀬幸弘の対峙１ -

夜の校舎の屋上。そんな本来であれば誰も居ない筈の場所に人が居た。

一人は俺。そして、もう一人。

月を背負い、こちらを見やる者が立っていた。

灯りもほとんどない暗い校舎を歩いてきたためか、雲間に覗く月明かりさえもまぶしく感じる。

舞台に立った存在の輪郭の形に黒く切り取られた月光の白が、明るさに慣れていない目に飛び込んできた。

徐々に目がなれ、輪郭がハッキリしていくよりも先に、耳がその存在の正体を察知した。

「やぁ、待ってたよ湯島」

聞き覚えのある声。

男は右手を広げ、俺を舞台へと誘う仕草を見せた。

「何してんだよ、お前」

自殺ネットで自殺の遂行を頼んだ。そうすればこんな馬鹿げた仕組みで聖を死に追いやった奴が現れると思ったからだ。

そこに現れたのは、しかし、意外すぎた人物だった。

驚きもそこそこに、男の浮かべた醜悪で下卑た笑顔に憎悪が反応した。

ああ、そうか。

「何してんだよも何も、お前が呼んだんだろう？」

携帯を握る右手に力がこもる。ポケットに忍ばせた左手がバタフライナイフの柄を捉えた。

聖の泣き声が聞こえた。

俺はここに何を為しに来たのか。朽ち果て、聖の下に行く前に必ずやらねばならない事。

それは、復讐だ。

自殺を望んだ俺の自殺を遂行しようと現れた人間を殺す。聖が嘆いているのだ。当然だ。

悲哀と怨嗟と憎悪と憤怒の限りをぶちまけて、四肢をバラバラに刻み、眼をくり抜き、舌を引っこ抜き、全身の骨を砕き、脳味噌を磨り潰してやる。

地獄の永劫に続く責め苦がぬるま湯に感じるほどの恐怖を魂に刻み込んで、殺してやるのだ。

例え、そこに現れた人間が、俺の知っている人間でも。

例え、そこに現れた人間が、倉瀬幸弘であってもだ。

「あぁ、そうだったな」

「死にたいんだろう？　湯島。早速始めるかい」

未だ、屋上のドア付近に立ち尽くす俺に、近づいてくる幸弘。

俺は黙したままだ。

「準備は出来ているから、いつでもいいよ」

幸弘は饒舌に口を動かし、一歩。また一歩とこちらへ。

ようやく顔の造詣までしっかりと見て取れるほど、光に慣れた俺は、幸弘の目を見つめ、視線を切らない。

眼だ。

近づいてきたら、まず眼を刺し、光を奪う。

もう一度、左手のナイフの感触を確かめた。

「いや、少し待とうか。な、湯島？」

幸弘が止まった。目測で5メートルほどの距離がある。月を背にする幸弘の長い影が、俺の足元まで伸びていた。

「話をしよう」

「必要ない」

左手に力を込める。

うなだれ、身を屈めるようにして、駆け出す。たかが5メートル程度。大股で踏み込めば一瞬だ。

あらかじめはナイフの刃は出してあった。慣れない刃物で下手は打ちたくなかったからだ。代償として抜き放つ時に左手や左足に幾つかの切り傷が刻まれたが、この体がどうなろうと、痛みに苛まれようと知った事ではない。

渾身の力を込めて、ナイフを突き出そう。眼は無理かもしれないが、どこでもいいさ。刃物を突き立てられて痛がらない奴なんかいないんだ。痛がってる間に眼を刺そう。指を切り落として、鼻を削ぎ落としてやろう。

な、聖。

顔をあげる。醜悪で下卑た諸悪の根源が目前に立って、こちらを見ていた。驚いた様子は無い。

突然の出来事に反応も出来ないのか。いい気味だ。その顔に恐怖を刻んでやる。

がむしゃらに伸ばした切っ先が、幸弘の左胸辺りを貫こうとする。

そこで、俺は祈った。頼むからこんな物で死なないでくれよ、と。

味わわせなければいけない苦痛は山ほどある。哀悼として、聖に捧げなきゃいけない苦鳴は永遠よりも長くなければならないのだ。

「話をしようって言ってるじゃないか」

幸弘の言葉とともに、視界の隅で何かの影が動いた。

刹那。全身を駆け抜ける激痛。時間が切り取られたように、周りの光景も意識も止まり、ひたすらに耐えがたい刺激が全身を打った。

「うぁがっっがぁぁあああああああ！！！！」

ぼやける視界が回転し歪む。

自分が倒れているのだと気づいた時には、天地がさかさまになり、月を仰いでいた。

慌ててナイフを握りなおそうとするが左手はおろか、全身に力が入らない。

何が起こったのかわからないが、憎悪の炎はそんな事とは関係無しに俺を突き動かそうとする。

身を捩ろうともがいてる所で、仰いでいた月夜の空に幸弘の顔が現れる。痛みと痺れがすっと無くなり、全身の怒りが再び噴出す。

「てめぇえ！！　何をしっっ、がぁああ！！」

今度は何をされたのかわかった。幸弘の踵が、俺の鳩尾をめがけて踏みおろされたのだ。

「っっっぐ、っはぁ！！」

息が詰まる。苦悶の呻きが意思とは関係なく、口からこぼれた。

「話をしようと言ったじゃないか、湯島。それに」

俺を踏みつける踵から重さが消える。

「っっんは！！　はぁはぁ」

俺は酸素を求めて乱暴に呼吸を繰り返す。

「駄目だろ、こんな物持って来ちゃ。ここは自らの死への願いが叶う場所なんだ」

そう言いながら、幸弘は左手を掲げる。

その手に握られていたのはスタンガンだった。さっきの痛みの正体は電撃だったのか。

慌てて幸弘の下から這い出し、距離を取ろうとする俺の鳩尾を再び、幸弘の踵が貫く。

「うぇげっ！！」

またも意思に反してこぼれる苦悶。

息を搾り出されたのも束の間、次の瞬間再び全身を鋭い痛みが襲った。

幸弘が、左手にスタンガンを押し付けたのだ。

「がぁあああぁぁぁああぁぁ！！！！！」

気づけば、俺はナイフを取りこぼし、身もだえ暴れていた。

極彩色に明滅する視界。荊の棘で満たされた海に叩き落されたかの様な激痛に次ぐ激痛。

まるで本当に溺れてるかのごとく、髪を振り乱し、足掻くが、激痛の海に水面など存在しない。息つくことなど出来もしない。

「興味あるだろ、聖ちゃんの話」

激痛の荒波を掻き分け、その言葉は確かに俺の耳に届いた。

痛みが和らぐ。変わりに心臓の鼓動が爆ぜる音が体の内から聞こえた。

「それじゃ、話を始めようか」

定まらない視界の中の幸弘の口許が弧に歪む。

粘りつくような夏の夜気を纏って、殺人者が、嗤った。

殺す者と殺される者 - 倉瀬幸弘と湯島誠の対峙２ -

「聖ちゃんって言うんだろう、湯島の彼女」

凄烈な視線が足元から全身を貫く。怒りだろうか。恨みだろうか。悲しみだろうか。

湯島が俺に突きつけるのは、ありとあらゆる感情をない交ぜにして固め、そんなどす黒い塊にさらに上から感情を塗りたくり、それらを研ぎ澄ませた鋭い鏃。

なんの物理的拘束力を持たない筈のただの視線が、俺の心臓を貫こうかというくらいに、強く刺さる。

尾骨の辺りから、うなじの辺りまで。脊髄を這うようにして痺れが走る。全身が粟立っているのを感じた。体を支えるための二本の足が根ざす大地を横取りされたような感覚を覚え、一瞬よろける。

倫理や道徳等寄る辺を持たない、獣が獣を睨みすくめる月光の舞台。

やっとここまでたどり着いた。

俺が右足を鳩尾から上げると、すかさず湯島が酸素を求めて喘ぐ。間髪入れずに上げた足を振りぬき、その大きく開いた顎を蹴り飛ばした。

ねっとりとした夜気を切り裂いて、赤い尾を曳きながら飛んでいったのは湯島の八重歯だ。

「あがぁぁあああぁぁ！！！！」

赤く染まり開かれた口から零れる絶叫は空へと昇りながら俺の聴覚を犯す。

再び怖気が、今度は全身を走る。

快感だった。湧き上がる殺意を臆面もなくぶつけられ、本能が否応なく感じる恐怖。心臓が早鐘のように鼓動し、体温調節などではない汗が全身を濡らす。

一人の人間が持てる限りの悪意と憎悪と悲哀、憤怒。これだけ無関心と自我がはびこる世の中で、人の感情をここまで独占し、この身に受ける事などどうすれば出来るだろうか。

普通の生活を営んでいたら決して出来ない体験。それを今俺は全身全霊で味わっている。恍惚だった。

俺は極上の快感の余韻に酔いながら、口を開く。

「なぁ、湯島。俺が憎いか？」

湯島の血まみれの口腔は固く閉じられ、返ってくるのは依然として鋭い視線だけ。

しかし、それで十分だった。

「その目だよ、その目で俺を見て欲しかったんだ」

俺の言葉に、湯島の目に宿った憎しみが一瞬揺らぐ。変わりに姿を見せたのは困惑。

左足は湯島の利き手をしっかりと抑えていた。

スタンガンの痺れと歯の痛みが引いた頃合を見計らい、口元を蹴り飛ばした後遊んでいた右足で力を込めて湯島の左手首を踏み抜く。

柔らかい物と固い物を同時に踏み潰した感触が足の裏から瞬時に脳まで駆け上る。

「ぎゃあああああああああああああああ！！！！」

湯島の左手の付け根に小さな赤い華が咲き、幾度目かの苦鳴が夜に木霊した。

足を振り、血を払いながら、俺は会話を続ける。

「わかんないかな、湯島？」

湯島は脂汗の滲んだ顔をこちらに向け、口を開かず黙するばかり。

「湯島。君は今、俺の物だ。聖ちゃんが死んだ甲斐もあるってものさ」

その言葉を俺が発した瞬間、湯島の目が大きく見開かれた。その瞳の中で困惑と混在していた憤怒が再びうねりを上げて噴き出す。

「ぶっ殺すぶっ殺すぶっ殺すぶっ殺すぶっ殺ぉぉぉぉすっっっっっっ！！！！！！！！！！！」

湯島が吼えた。

「アハハはははあはあっはあはハハはあっははっはははははっははは！！！！！」

自分の高笑いに包まれて脳が揺れていた。

こんなにまで、人が壊れるなんて。

こんなにまで、人が獣になるなんて。

こんなにまで、人を自分の物にできるなんて。

俺は遠くを想い起こす。

なにかわからないけど、とにかくままならない。そんな漠然とした不快感に取り付かれ始めたのはどれ位前からだったろうか。

やがて、漠然とした不安は色と形を整えて俺の背にのしかかってきた。

それは、いかにして俺は世界と交わるべきかという問い。

人はどこまで人の心を支配できるのか。占領できるのか。もっと分かり易く言い換えても構わない。俺はどうすれば、誰かに振り向いてもらえるのか。

ずっと心にそんな想いが居座っていた。毎日の生活に重い枷をつけ、俺の視線を地面へ縫い付けた。

親や教師は自分の理想の子供像を重ねる依り代としてしか、子供を見ない。自らの価値を高めても、それは備わっている能力が功利的な物差しにかけられ、履歴書に値段が付くだけであって、それは良くできた商品に過ぎない。誰かの為に身を粉にしても、他人はそれを踏みつける階段として踏み固めて行ってしまい、後ろを振り返りはしない。

赤子は皆同じだ。猿のような顔を赤らめて何も知らず、ただ、泣き喚くばかり。

しかし時が経てば変わる。経験を積み、幾度とない選択で道を別ち、気づけば同じルートを辿ってきた人間など居ない。成長と共に刻まれていく顔の造形以上に大きく異なる、十人十色の「自分」が居る。

でも、その自分の形にぴったり合う隙間がどうにも見つからないのだ。

自分では普通のつもりでいても、鍵穴を覗き込んではどこにも合わないことを確認する毎日。歪んだカギで、なんのドアを開けるのか。どの箱を開けるのか。俺は、俺達は何を得られるのか。

回りを見渡せば同じ悩みで溢れてる。ネットで延々とパーソナルを垂れ流す奴ら。廊下に貼られた順位表を見て一喜一憂する奴らは、自分の名前が誰のどんな目に晒されてるのかにしか興味が無い。口にする物、耳に入れる旋律、身に纏う服、脳を巡る思考まですべて他の誰かと同じであるために全部コーディネイトして、そうして出来たオンリーワンな自分を、その他大勢に認めさせる。それが全てだ。

俺が俺であること。私が私である事。僕が僕である事。

自分とはそういう者で、他人とはその為の物の筈なのに。他人のくせして自分でありたがる。

そんな矛盾が俺を苛んだ。

だから、俺は考えた。解決法を必死に探った。そして結論を追い求めてたどり着いた答え。

それは人を殺すことだった。

恐怖を、人生の最後の瞬間を。命の灯火の今際の輝きを全部独り占めにすることにしたんだ。

合うはずもない歪み同士。解決策はどちらかを崩し、どちらかの形に合わせるしかなかった。

その為の手段として、「死」に関わると言う事は恐ろしく有効な物だった。確固たる自我が崩れ、無為に溶ける瞬間、いかようにも俺で塗りつぶす事が可能だったからだ。

それは新しい世界だった。引きずり続けた悩みの解決。画期的な地平が開いたと、確信し、心のそこから喜べた。

そうして俺は自殺ネットを組み上げた。死の間際、形の崩れた人間を自分の色で染めるために。

最初はそれでよかったんだ。

背中をトン、と押してやる時、僅かに踏ん張ってた体から全ての力が抜け落ちてくあの感触。最後の最後で怖気づきながらも、奈落の闇へ落ちていく時の絶望がにじみ出た表情。

生殺与奪を握った万能感も悪くなかったけど、なにより、あの特別で濃密な次空間から得られる恍惚は何にも耐えがたかった。

人が死ぬ瞬間。十何年の歳月が全否定され、命が血みどろの肉の塊に変わる瞬間。それに関わった自分は、どう考えてもその人間にとってのスペシャルだった。

でも直にそれじゃ物足りなくなった。

正確に言えば、スペシャルから日常に引き戻されるギャップが身を引き裂くかのように苦痛だった。一瞬だけのスペシャリティなんて、恒久的な飢えを満たす物じゃない。

相も変わらず、認めて欲しい自分と認めてあげる他人が混在したヒトの道を歩まなければならないと思うと頭が割れそうになるくらいに痛んだ。

だから決めたんだ。俺は。

「なぁ湯島、そろそろ終わりにしようか」

右手に握ったスタンガンを再び掲げた。刹那、湯島が動く。

武器を取り上げ、片方の手は砕きまでした。無力化したはずだった。

しかし、湯島はその砕けた左手をこそ振るった。

「がぁぁぁあああああ！！」

咆哮と激痛で顔を歪めた湯島の顔を認めたと思った瞬間、血しぶきが顔に飛び掛ってきた。

慌てて、身構え顔を振り払うが一瞬遅れて今度は激痛が右足に走った。

何が起こったか理解するまもなく、あまりの激痛に思わず右足を振り上げ、バランスを崩す。倒れる俺を押し上げるようにして、湯島が身を起こすのがわかった。

倒れながらも咄嗟にスタンガンを持った手を突きつけるが、身を捩って交わす湯島。

一瞬の出来事だった。再び体制を整えた時、形勢は大きく動いていた。無様に尻餅を突きながらも、慌てて湯島の方に身構える。

湯島は俺の足元からまろびでて、立ち上がりこちらに対峙しようとしていた。

その右手にはたった今拾い上げたのであろうナイフ。鮮血をポタリ、ポタリ、と流しながら左腕をだらりと垂らしながらも、こちらを果断なく見据えて距離を保っている。

なるべく視線を切らさないように、一瞬だけ足元を見やった。

白いハイカットのスニーカーの親指の辺りがどす黒く滲んでいる。恐る恐る、足先に力をこめると、声が漏れそうなほどの激痛が走った。

軽いランニング用の靴だったのが災いした。恐らく湯島は靴の上から指を噛み砕いたのだ。

歯を食いしばりながら慌てて、視線を湯島に戻す。

湯島は嗤っていた。血に染まった赤い三日月を顔に湛えている。

凶刃を携え、血を流した鬼がそこに居る。全身全霊の殺意を俺にぶつけて立っている。

「終わりにするんだろう、幸弘」

鬼が低く、そう告げた。

殺す者と殺される者 - 湯島誠と倉瀬幸弘の対峙３ -

俺の眼前で、狂気に狂った人間が一人、月明かりに照らされていた。

中学のときから顔見知りの人間。あまり自己主張をせず、他者におもねることを巧みにこなしていると思っていた人間。そんな人間が今まで見せた事の無いエゴと狂気を存分に振りまき、ゆがんだ笑みを浮かべていた。

俺がつぶした足と、俺をつぶした足。深紅に染まった二本の足に支えられた体は、引きつった笑いにあわせて小刻みに震えている。ナイフを硬く握り締めた俺を前にして、倉瀬は、倉瀬だった何かはケタケタと笑っていた。

その不気味さは、獣と言うには不可解で、その醜悪さは、異常者などとすぐに思いつくような言葉で形容するには足りない。

鬼。

そこに立っていたのは、奇妙な狂気と意思に満ちた、鬼のような存在だった。

「湯島、そのナイフでどうするつもりだ？」

ニタニタと、鬼が話しかけてくる。ナイフを持った俺を取り押さえようとしてくる様子は無い。

倉瀬に踏み潰された左手は感覚も無かったが、痛みも無かった。

右手一本で握ったナイフで人を殺せるだろうか。眼か。心臓か。腹か。

どこを刺すべきか、考えを巡らせ、柄を握る右手に力を込めなおす。

聖の仇を討つ。考えることはただ一点だ。

頭のイカれた戯れで、聖の命を弄んだ鬼はこの手で殺す。

「〜〜〜〜〜〜〜〜〜？　〜〜〜〜」

歪にゆがんだ口が何事かを垂れ流しているが、耳には入らなかった。

視界の端でスタンガンを見つけた。倉瀬の後ろ、5メートルほどのところに転がってるのが見える。

奴がその存在に気づいてるとしても、あれを拾って、こちらにかざす前に、ゆうに三回は刺せるだろう。

ふと、自分も鬼のような表情を浮かべているのだろう、と思った。

唾棄すべき外道の倉瀬を憎む心は、俺をも外道へと貶めるのだろう。なぜなら、俺は今から、人を殺すのだから。

しかし、それでも構わなかった。理不尽で凄惨な狂気をそれで討てるなら、この身が、この心がいくら穢れようとも一向に構わない。殺人の罪を被ったところでそれが何だと言うのだろう。事実目の前に裁きを下さねばならない悪が口をあけて笑っているのだ。

聖の顔が浮かぶ。

聖に話しかけてみたが、言葉は返ってこなかった。俯き表情が伺えないその顔の、頬が涙に光っている気がする。

自ずと、俺も涙があふれた。

もう少し、もう少しだから、待っていてくれ聖。今、お前の無念は晴らすから。

ナイフを握る手に再び力がこもる。まなじりに溜まった涙が溢れこぼれた。怒りが、悲しみが、悔しさが、感情の塊が一滴の水滴になって、目から流れ落ちた瞬間、その涙を置き去りにして体が動いた。

「……死ね」

ふらりと、前に倒れるように、体を傾ける。

一歩。また一歩。倒れる体を支えるようにして、足を出し、三歩目を踏んだところで、顔を上げた。

口をついて怒りが溢れる。

「死ねぇぇぇぇぇぇぇぇぇぇ！」

眼前に迫った倉瀬は、両手を広げ、刃を迎え入れるように立っていた。相も変わらず、不気味な笑顔を湛えて。何を考えているのかわからない不気味な視線が俺を貫く。

一瞬怒りも何もかも消えうせて、ぽつり疑問が沸いた。

なんで、こいつは笑っているのだろうか。得体の知れないものへの疑問と恐怖。

そんな疑問も刹那、硬いような柔らかいような。柔らかいような硬いような。不思議な手触り。そんな奇妙な感触とともに、俺の怒りが、倉瀬に届いた。

臍がある辺りの少し右上。人体の内臓分布としては何がある辺りだろうか。とにかく、なにかの内臓であって欲しい。負荷を感じる右手をこれでもかと押し込む。

ほんの一瞬を間に挟み、どん、と体と体がぶつかる音。

左肩からタックルするような形で体をぶつけ、押す。同時に手首を返して、右手をひねった。

粘つきのある湿った音が微かに右手を伝って届いた。

命の破ける音。

悪を討つ音。

人を殺した音。

俺の突き立てたナイフが、倉瀬に赤い穴を開けた。

声にならない嗚咽が、耳に届く。倉瀬のあごが力なく、俺の肩に

乗っていた。

苦しみの色濃い、断末魔の苦悶に、頭が沸きあがる。足りなかった。こんなささやかな苦鳴ひとつで俺の気が晴れるわけも無い。

聖を殺した。自分勝手な気狂いの果てに、人の命に歯牙をかけ弄んだ。もっと。もっともっと痛めつけなければ。

慌てて、ナイフを引き抜こうとしたとき、ぬらぬらと月明かりに光る倉瀬の血が、俺の手元を狂わせた。勢い良く、突き立てたナイフを引き抜こうとし、血で手を滑らせ、柄がすっぽ抜ける。

「っく！」

勢い余って後ろに数歩たたらを踏む。体制を建て直し、すぐさま倉瀬に向き直り、顔を上げたところで、俺は動きを止めた。

倉瀬が、立っていた。

ナイフを突き立てた腹は赤黒く染まり、足元に血溜まりを作っている。しかしそんな凄惨な光景が俺の動きを止めたわけではなかった。

倉瀬が笑っていたのだ。さっきまでとなんら変わりは無い。ニタニタと気味の悪い笑みを浮かべている。

顔中に苦悶の表情を浮かべ、玉のような汗を額にかきながら、いぎたなく涎を垂らしている。しかし、そんな惨状にあってなお、呻きをもらすその口は半月を象ったままだった。

「うぅぅがぁあうぁぁ」

倉瀬の声にもならない苦鳴が夜に響く。倉瀬は零れ落ちる命をすくい止めるかのように、傷口に手を当てると、血に染まった自らの手を俺に突き出す。

「見ろ、よ。湯島。ははは、はは、は。血がこんなに溢れてるぜ」

焦点の合ってない目線を俺に投げながら、ナイフに手をかける倉瀬。

とっさに身構えた俺を他所に、倉瀬は体を折ると、両手でナイフを握り、雄たけびを上げた。

「うぐぅあああややあああやがあああぁぁぁぁぁあぅ！！！！！」

怒りも忘れてすくみ上がるような叫び声とともに、倉瀬はナイフを引き抜き、それを放った。

血の飛沫を撒き散らしながら、夜の空気を割いて飛んだナイフは、俺の右後ろでカラカシャンと音を立てて屋上の床を転がりすべる。

倉瀬の傷口からは、先ほどより更に血があふれる。それに呼応するように、笑い声が倉瀬の口から漏れた。

「ははははははあはははははあっはははははは！！　痛ぇ！！　痛ぇぇよぉぉおお！！」

自分のエゴで、人を殺し満足感を得る。そんな人間ですら、すでに俺の常識の中で埒外で、恐ろしくて憎らしくて、もはや化け物以

外の何者でもなかった。

しかし、今の倉瀬はそんな化け物という言葉すらあざ笑うほどに狂おしく、軽々と常軌を逸している。腹にナイフで穴が開けられ、血は止まらず、おそらく後数分かそこらで、意識を失うだろう。それだけの血溜まりに倉瀬は立っている。そして、意識を失ったが最期、それは倉瀬という命の終わりを表すに違いない。

それでも倉瀬は笑う。

泣き事を吐くでもなく。恨み節をぶつけるでもなく。倉瀬は笑う。

高らかと。まるで、自らが小刻みに震える足で立つ血溜りが、世界の中心であるかのように。

無邪気に。まるで、見渡すばかりのお菓子とおもちゃに囲まれた子供であるかのように。

不気味に。まるで、地獄の底から、天上の煌びやかさを嘲り吐き捨てるかのように。

死ぬのが怖くないのだろうか。そんな人間がこの世に居るのだろうか。

倉瀬の笑い声は、俺の描いていた常識を、当たり前の世界をいとも簡単に叩き壊そうと押し寄せる。

ここまで来て、今まで彼岸の火事であった自殺ネットの存在を思いだす。

自殺ネットを利用し、自らの命の幕を下ろすことを決意した人間たちは何を考えて、生を辞したのだろう。それは、目の前の倉瀬のような、狂気のなせる業なのだろうか。

そんな、問いが、今まで自分の気づかないところですぐ近くに存在するのだと、気付き、いつしか、心は恐怖に呑まれていた。

目の前の、血で踊る狂人はこれまで何を考え生き、これから何を思い死ぬのか。

以前、関口は、自殺をテロリズムだと言った。メッセージであると言った。死をもって信念を貫き、何か漠然とした、それでも頑として存在し、自分たちを追い詰める間違いを正すのだと。戦いなのだと。

そんな信念が倉瀬にはあるのだろうか。

死んだら何もならないじゃないか。死んでも花は咲かない。死んでも世界は変わらない。

命が終われば何もかもが終わる。二度と会えない。二度とぬくもりを感じられない。二度と笑顔は見れない。

「なぁ、そうだろう、聖」

俺は、無念を秘めているはずの聖に呼びかけた。俯いたまま表情が伺えなかった聖がこちらに背を向ける。

「待ってくれよ、聖！！　今、あいつを殺すんだっ！！　復讐、できるんだよっ！！」

聖が遠くなっていく。俺は声を張り上げ、聖を引き止めた。

もう一度、こっちを向いてくれ。

もう一度、その顔を見せてくれ。

もう一度。もう一度。笑ってくれよ。聖。

そして、俺の心の中の聖は音も無く、消えた。

気づけば足が力を失い、コンクリートの屋上にしたたかに膝を折っていた。

死んだら、二度と笑えない。当たり前の事じゃないか。だって聖はもう居ないのだから。

死とは、そういうものではないのか。

それなのに、

「なんで、笑うんだ、倉瀬」

それは単純な好奇心だった。怒りも悲しみも、すべてを置き去りにした疑問。

そんな俺の声に、笑い声がやんだ。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4325l/

ＤＩ［ｅ］ＶＥ

2011年10月6日05時33分発行